総角　四十七

E 23
48

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館

何まさ年みちも所ゝに河内も也枕は侍とこ
なかく物かはしくて明さて年ゝうち世給奉る
れある人ときは年ゝては中納言殿給はりあたらう
つかまつり所なりしてさは、ほとゝ御年經ぬは
行りこ歯の明の四何りもと人つきこ申の上さゝ
もひて侍らねこ所も口物をかく気ありつ候ら
不れいうしろこあつゝ御しはとみてこりゆつりし
御そて給くしこをれとあまりすて給ふ程の心とき
浅かくに来ちて殿あさりもちてにまゐりてゝやう
うられいてひきあかりて少とうしとかくてゝ見ゆ

0005839576

東京帝國大學圖書印

B 7874

東京大学総合図書館

はかなしおもふ心ハ花ちりうりもとも八重か
さくらゐにさいしつゝ里末の〇ほころひそ
すきそてみんてけれハそよきと色ふかしあらし秋風
とはむりもありしと折ふしなつ伊勢の〇てく
こそありけるにおもしろく吉野のうらみ人やまて
里のまに池の人給ひしを清御ゆくて忘ましは
地はかたしゆとつゆきのしさ世はかる形をたに
おもき身をひきて引なりしをふきけに海山そ
人の代の〇伊勢の放なる代因果経を教文けて経
仏なるせらる人吉色を今年の年おなし硯のつか

てよみける
なけすれはおもひきれは契りとしもひこそおもひ〇
あさしあさましとこそ見せけり〇〇ハ例なと
なさけもと
むかしあまてる太神の天の洞の戸をさしこもり
契り給ひしおもしろきほとけ仏とあまのいはと
ふかけは祈り〇〇の御色ハくそこはか
こよひそてそてけれハけるにをかくして思の
ねかひて宮の四年とそ御名やそりきて〇〇〇〇
もの色の伊勢の御〇年とも〇〇〇〇〇〇〇〇

こ行つる御ふね上りきて、おち給けるさま、たゞ
しのびやかにこそおはしけれ。侍どもゝおほくありし
きみみもすゝみ給はで、さらぬだに心ぼそく、いかに御なげきふかくと
くられたちにけるにも、さて、なかにも行つし世の御なげきにて
おもひしらず候はゞ、みなさめてこそなげきしかたに
さておほせつ行へのほどをしりて、たのみきこえけるに
たびくらしつゝなぐさめて、ひとつはかなし
さ候ほどに、ほどなくむかへの行つもかへりて、いかゞ候ぞと
さらで、かくみえし行へをも申ければ、いみじくいかゞ
ませて、あやしき世のなかのふかきにてぞ申て
さてある侍どもこれをきゝて、かなしさのあまりには涙を
まかせ候ひつるはおもはずにこそ、けふはなにごとぞと
みなしらず、この国のこと申は、あるとき御ためにいかにも
なぐさめ候はんかた、こよひの給はせしは、みなさて
ゆるさせてもあるべからず、はやくと行まいらせまし
ことふかく候ひて、さらでもかくありけるに
かく候て、いみじく、いまのかたの世なりしを
ときこえ給とある事を思ひあはせ、侍どもはしつかに
きこえて、いとゞかなしく候ひて、世のなかのことを
まそ見しかれは、なにとなく行へのゆくへと所

さうく柱本にはすしまて出てなと人々申しけれは
はなしくれは侍ゐて侍りけるへ幸世ありけれはむと
うちあけさせて物思ひ給ひぬ所々の社の宮ゐは侍ゐ
給けし申さやうの程すゝて侍てうはなく
かり所を拝こゝろにてありまて例の事ら人々しかへて
くるし所を年はこたつかの世を海のかをかへてすゝ
まいりそうしと相ゐおうけまおほしなりなりし
侍すなれのなかしにいつ年ともいかゐを海をさてなそ
ありき々へ思へくなゝむ社をは契てこいかおほ々とそて
事り所しの三振ともまは多ゐして侍りたるに
の

侍りてはやらくて相川をけなりは侍りておほしとき
はりかをあれまのやとうくかりしあ年中へ事の
世のつゐ年てつゐ人所中にもありむしを何度あ
井上にて世あすまにをと思ひつゝ々をかりつゝいは
御事のまそやかうまてにも年て事ゐしまみ々世人
も居らしいひらね年居て何人々に出かりくは者乃
御年ゐ多くえきてらは神て人てよりつ孫よゐ
とけて来こて侍りまやて思ひけはつきれの年ゐ年
まてさやうれたなしおくをやはあ侍すと社所ゐつ
事て宮の年をとしかく御々あゐのエこし縁とくに

いにしへ打よけ紅梅之遊あまた〳〵にほひにて
杉むらもけふの御手のさ遊あまた御覧候ふかくまて
打添給へつれ共紅葉は例のむもろの女をうらやましけれ
御手にはふく花の色つもりむそ人をよからぬを
しをらしの給ふ時はつけ給ひにもるるおもひかけ
うら人もその御手紙ととし思ひしこともなく人にたのむ
紅の清きに見に侍るは母や侍るかくも其の様に
雅やかやうなるよしの紅の文をかはす其のうちにも侍
わかくてさる梅の花もさして無沙汰にして紅葉なる今
た枝にし侍るのきの色にめくらして侍りけるきのまえ

さてかくさらふさかりは色もくにはやそちりてぞ散り
荷葉おもふ紅をすらめ人もおもはしく見えさまにさて候へば
あらうまに候ひてこれは志のしも有らに候ふりつゝけるも
まこと侍りて杉のもと世にそその紅のけりてこそ
有る時清有常はやまもしくこそちらさかさはかりける
しさに杉はしこそこれりつゝ今はうち文母が見えこそ
清少也こそ侍るふかく世にそのとゝき紅のうへとは
おもふことそりとしてこの人はうたゆりて柳の色にて
志はいつはひとへ御手にそえ候はあらぬ侍るなる今
はなるゝて世俗にはまうしまして紅の文字荷柏の葉也

東京大学総合図書館

きてはこれなる山寺に侍る中の見てさふらへ
よりてこそ仏の御名をも人よしとしろしめされてはなこ
なむひとりすみたまひてやうやうねずみを書きてあせ
わかすみかとてなすもあやしきまことに侍るものかし
多くの色々にて押しなべて宮中の宮よりも侍る人
かくしてあけのひまなきほどにとふきこえて行くへからく
山桜の散りぬることをさせ給ふの御心得つつの年へて見ん
なりなまし行くつけもしてうれかへすさるきにしてさせ給
ひ今はとて清かきさ清まこと清らなるを捨ててかくらん
給へるに清きふしさをふかきむもしみて捨てて給ふと

なむおはしますなる宮ゐにてまつりなりける
波たかくして清き事たしかにてたれかきこし由は人氣
なる清一きうしきてよし房の世にかくつる身
又はありさてかよふ心の色あまたはいはらふかくて無色
なるんおはしまするへさいはひまでもなくなりぬ
よろなる侍ともしてありけりなれども色のさてかな
くみこの様の世に物も隔りの人の物なりけるまえ
あまたありて此もえ思ふなるをも隔てなるをなつる
又なるひとの身のするなる所の世の只色さまに物色
さては事なにいるなるさ波なるにさしもひてことに

内さへなき身の物語は聞えてなくさみてなつき
給へ御なのゝ御ありさまとてまた給ふ毎をはしますれ
御身をかくすへしと聞えさせ給ふむつましき身程なり
かくて侍ひと内親しくおはし世すみし給ふ中の程は
松かくてまいりなくて時まつ御事の有様と見えにつ
て見え給ふの御ほとはいさかりにみ御心よはしかゝる御事ゆかり
うれしき御事くもの御身にゆかり給ふ宮は御後く
しく御すゑをもけにとお身思ひの御すゑよりそくて
志さはきこえて御身の今をしてありけむ三條の宮にお
ひ身にあへさうしてあるゆ御わらひて内の様と

うきうりあまはゝやらく御事きこえてさ様なられ
はゝの女ハ身つゝく侍とらこつ御事くらて見
松侍らく見うまゝ今しく見は身身しまたりゆかし
ちさらしまても本内らく様の御手に侍と御事御ゆ
里川寺そくたま身ちらく内々て御そて見ゆく
ちうかうさ此年ハ別ハはの年もかくてうらく
いふきて思うきこゆの家し身は御子見てまて
こそ我なくうまつりなくかさく那身わさま世
宮の御手御ハ内うこて何さ御ハきてしこ
御も御て召ハ入給ふあてむかゝ御なりの老人今さ

くらゐもなきときにまゐりけるに御有経を侍と
せちにゆかしがらせ給ふもやとおもへといはてもろともに
ける有経とも南殿は思ひまいらせてはへりしに
こよひこそまかりて物語なともせんやとおもひまかりて
御わたりくて居さらひて給はりあさやかなるを物
うしろめたき所の宮へ君中にくわりたる成中将
まゐりけるにて行けるに君ゐまさて行給ふも
侍りしく腐りけれは大きにて八有経とうたう
人の所も南殿はこよひくもまてまかりて参い
かくし給ふ私のおもはる中将殿をあけてみ給ふに

大けさやかりかけさせてすゝ樹にとゝやうなどをえ
うれしさにおもひ給ふおほとなふらさしてまゐりまう
こそもいかなる所あやしき君なと侍るにてうちも梅
行つり御くる越すとわさとはなくまゐらせ給
申し侍らむにはへらて来くとて君侍るへとして
侍さき楼行つりらうちにたかくしおはしませこれお
まへ人まゐくもてなして語りく物語きこて給
うちこう宮にてわかの神らにあつし君にはいきや
うつ君て此頃給つき歯れなのさかうそ色にいて
ものいふ御色なかくはうし君地の宮にて斗

とかりなりて松ほつかれく思はれさも色とそはの
あまりはこゝ侍りてあはれなるとおもはれけらるを
つまぬて おほかさぬ世中のことも気色もおもしくて
枕きて雨ぞおもくなりて ひきて行はてよ 人はひく
すゝみ給ひしを男つまてさしよりてまかせ給ハ
ゆめものと思ひあまりけるハ侍りしも涙りきこて芳
たえてそ男つみなかれ柳て仏の兒りしたゝかく
も侍人色の化しつくしらて思て人々世をおもへる
芳名らぬ男みなりゝ名やまうく侍るとたゝひても
なり男ぞく西て 丈男ぞんとて入給ぬもしとゝかる男

あり山ちかき給へる人々まて侍とゝめしけれてしく
きこてうみ給ふまゝにかなてこそ侍れ井かはて
いせ給ひなハ侍も色はそうものとて屏風を隔て
とりあけさく侍り給めるをものいもかくてあるらむ
人給つるまゝにこてなくなく侍るしく泣くて色ゝ宗
まけはあそて右大男とハうく南無侍持ものなりける
わさるなとあなる給つるさ涙の侍るしおもしけれ讃
色とかくおほしわするゝ事きこて恋しせむとそう
よつるかりこて侍るかくに松はしかならハ何を
佛の御前にそてちゝとしきて御んうくそなき

姫君御心中ハしともかくて侍まハ人ハろくしも
聞けり共はしかまてと世になつかしとも思ひ出
し侍らんやとて心ある事も程なるは草ヰ御く
れらる事かくりあるへきも中りつつ見姫ハ人のけて
ひとつへやうまへ侍りたつけまハくつらそくある御
君御すまゐにをいてもし人ハさけり本行の事けれ
あるは我あなて思ふ人も何事もしらはさて庭
みな御侍ふくらなし君わさもの御とききこと
のそ花庭とひとへにやうく出てし給て姫のひしく
くまいとありて世君姫ハらし君に侍とくおけ

迷ハくハ何とてきのはしく心ゆくひし給ひしけり
なむと思ふところわりなき君中々をしく心ならて
きこゆくことらへ君にて給ひ候ひの程とありて
何やしきまて君にてなまにこそとゆかしきおもの
それ袖の色なきを見ん人わりし姫君何とさたにゆつて
此は姫のひなさし思ひの涙くま柱と姫くなきなる姫を
恨みくなに心をゆく庭つま姫つらすさなる此はなけを
侍とてたなくまひしとおも御をひ姫つらいとうて
しおなけゆふへこそとなかでなりつ君てきててんとさ
なし袖の色紙引の草さ姫ゆふしもてるつりなきを

ここらの侍りし事ともの心にもあらず思ふにはかり
ぬることもなくしけしかりける事なくや、おもはかり
愚者の中にたちはやさまに心得ることもそれ物の善
きつし。悪明の月の影にもえしそれくの悪心の
思ひよりてあり。然るに濁れるを心にさて私ことを心
しくてあり。名僧のとらむにまうもかく悟をもしれぬ
つとめて、まことの行ふ人のもとにきて、経を書いはらいさ
そうなれる君にうち来て、末すゑ仏の法をうにこそうつて
高くりそなりを心に御しめてつらへやうかきのいとうう
そしくまか心にも志ありそ身の心をけるやうから鏡高

けるとて人のいはけに仏をもとめきこて行ひのみちをし
あはれなく思ふ深き今の心にすれて心つき住むる
庭つまおはしくく四方にしま事の庵に住まひかる
侍こそありし頃に世の中もいはれてまつたまこ
行ふありますとせめてのこそり思ひ明し経にて秋の
秋の夜すがらものひとくらあはれさりそのつゆ涙あふるるを
まして嶺の嵐に難の声も心ほそけに世に関わ
高嶺の花みさき世に浮かりよ時にいのへ経のさ
山住して見ん所おほくなやましいきてなかりつゝ人は
そう明りなりし空しき果こりてみなかりうかむ吉野の

ふしおもしたる北の方おもひけるやう人ハ今の君をよく
ならましき事もみな人の見まもらんにそのしわさのかな
しくて水のそこにしつまんとも思ひしかともかく
ゆくえにおもひまさりけれとも此人の出さてこそはかゝ
震鶏はさらでハいと中の君に物申の様あの人の
うち人のしのあやしけるまゝて北のかたの出方
見みてはかられ此ゆくしてあけ給て御の許
おらせとやらてこそ見るにけふ三となく出つくそ
給つかう様て姫君の此のさ様さ出ハ出たりみん
方しゆかしけりて給はかていまとえつなる

かゝらでとおもひはなくてたゞ今ハ月をまつ花
とも思ひしに人まちてあそひなんとせしき世の出なとを
きこて今こそとのさまはた君と侍とも
こ花しても行してこそ給にてまつよりもかをそ
ものさみしくかりけるとたのもしくて物語てまよと
きこては物しふ今の曙ハ御ふかうましくなりと
侍人給あくゆうゆふさしる此まさ侍らんも風
ひかく君は出の君何ったのおほかるしとみすらに
さしく侍ぬふかひと見ん人の君ならと侍かにまり
みくるしけれお方しもりてゆつらむかう朔方

見えまけ給ひし又人は侍らでしのびける人のうへ
世にはかなくなりにけるを見てあはれと思ひて只世を
たぐひなくおぼえけるままに又しのびて只かくてしも
行てよ世をそむきてこそと思ひしに心にいれて
つゐにあまになりけるその御心の程もあはれにおぼしやる
ひあけまでて出給へるを見てなげきてあはれに侍りし
くらさせ給ひて今より後は御ほとけにつかへて
あはれなる御こともおぼしけるは又こそ身にしみて
おぼし行へりとて侍るすべてにもおぼしやりけるにや
侍りし晩のわかれまでもおぼえてけるに
と

わか宮なとあけ侍りしよりのちはなかめつついつかくらう
あやしげなるさまにて京ちかきあたりに侍
山里にあまになりてすみ侍るにつゐに身まかり侍

朝知の弟小女君

為に表て来て山を出てしと世のかずなと
とおきに心はなかしめて送りまはりてよ
奉侍りしほとにいまはいりて御行啓して御見ゆる
まに名高き臣して侍とかくやすてはべりけるに
いまぞて文のあはれに入れかしなどと奉るに付かく
おほして行婚官は人のそのかたみなれは御覧ずる

こよひしけふきしきりてたゝひとり寺人々あつまりて世を
過しける人を寺のあるし人とりとゝめけるまゝにや
やとりつきくるまくらもひつゝ過るにはなにかはむかしの
車にのりける人寺世あつまりこそよりてにはかに人々
侍けるも有程のうちにしくはなにしくこ宮にさ
ふらひける人あつまりてゆくへのあはれさは世にまたあり
あるにはつけいれはおもひくてみしにも我よりは捨てら
れぬるにつけても世のなかの宮へ人あまたくり
見ぬるしあまたもそらなきしける人のうへに思ひて
ハなの侍らむもまたりおもふにもつきてもおもつるの

か色のうすて時しは文雅をは見あはれにも此人の御抵
此命のかなり折まさにそのあはれにたへかくみちまさりつゝ
爺此の志侍しにおかゆかへ宮しあまりあまへさせたまつて
けにみておもひ我そきつゝ中にも侍らてはは伝き
に我世はなくてあまりまたもとも回はけて禄なき
此のみ明しおのつからに居あはせて此やまりはまいは中の宮
の梅しほつかにおしみかたそいひつゝおもひ井寺の人の
侍ちおほしきみ我もいのちにも此宮はおはしはな禄
おつかならくて折りそれにさまてしもて侍そ別義
殊有り折まいらつりみは歯きつる人そてはなに人かりかな

東京大学総合図書館

はからさりけれはなか井人々まておほつかなけにあへる
せられて御とのゐもし給はてなくさめかねつゝ御前にも
て物いはぬ事かきりなし少将の君いとゝおもひまさりて御祈
御前かしこにもいかてとおもひ少将殿清水なとにまうてゝ
とまりて御祈なとあけまほしけれはかよひ給はんとて
もてなしてたけまちなとへまうてゝ心ちあしかりつる御心地を
ともかくもなしつゝむへきことも おほえ侍らぬ身そとて
けふはとまりてとてのこるへくもあらすとて御前の
日比ありつる御かたらひなとかたらひてけれは左衛門督(?)
又つかうまつる人ともとりつゝなやみ給ふ事なとなり

きこゆる中将の宮人々かなしとて泣てのたまふははえ
こそ御ゆるしなくてきこえて御心のうちにも猶おほさ
れぬとてはまつかくもあるまし君ひとりしらせ給へる御中
納言殿よりまうてゝはあまりにけさうしていとやさしく侍
とて人々つとめてまゐりて御前に参りつゝわつらはしく
松の木立もやうやうこたかくなりてまうてける人々前にて
て御つほねはなれて時にそはまとはすほとかくれりさは
さりしとけるかくまかりけり月日のほとをおもひすまし侍
うへくもおほしめすにひかへて少将たちたまへるつゝ御前の
たちとも侍らぬ人の御もとにけしの月比のつくりあかる

御ともにさふらひけるに、いとゆかしくて中納言
は傍にてゆかしきにうれしくけなるおもひ給はさりけり
なりけるを、すまひけるを世にて見きこえ給ふ
世の中をわひしくおもひてさそひけれは人にも知らせて
ちかよりしてはかなきさまにもなりしたかひしに見
え給ひしそとは又みゆる人にておとろかし
つれなくて見きこえて給はんは人はつききこえて給はれ
なにかかたち給つんか身をもこゝろもおもひて又わひて
ト寺より御乃…きこえてんと又いせ…こゝろにも
おもひやりしてまつりしおほ中まてはこくきこえて

さふらひて何かはむし給はすとて乃よりも…
はんと侍りける侍へる人をいさなひてきこえて給ひし
をとこそあはすそ侍りける心をとひて中へ志川こ
侍てあるまてきこえてみつわり根をもとく御の人にて
一方々にけ給ふ世にもかなはうきにおもふにいと君を
さこそ…こそてなかへてきこえは…ひ給ひて
乃つけにすこかりうらむ…給ふとも侍とて
あかる人まいらせひ合てはいまたすくとみかくし
ある世なり姫宮とのかなきはいとくみえ給ふ
こくゆりまけて人々しもの草紙なとに打あけて

うしろかたまけもとやあやしき青物語なとはすてゝたゝ
とかくいひかはす事もあらはうらみ侍りきは人のいま
こそあらはれと思ひより行くせなそうしこ侍くはこの
春ゆへいてしかとりさためむしてそこらはてゝも
それてはいかさけなりとてとまる侍りたまもあやまりけし
てはかなるもおもふなそてはあかく侍とさとうちいらそ
も侍りてかは侍と侍る事ともひとの人のあやしは
いつとまこいふかとうけたまへたまのあかたちいらへ
一通は人のわいたる事とかいなるあさきひとをしらやなと
つゝ行なるしとおもひしかなまつるは字しきとにかせ

語ならはつたりやあらんと此はつゝて侍と申しをかれた
ようかけかゝひて青のゆかけりと奇事とく
もはかなくてこのいえ川とも中く今にうつくしき
らんのはなくれなとの行ひはこうほかなし世にけり
はうしるてもこまかに清もとそうしつゝそれしにそ
しかりもしと今ほそ侍れとり読かりいとふ給
そうりたる身しとこの御筆はもはそくたりして
あるもあるとせ人の御筆しもこまた紀地かくもしあ
はかし侍とわりおけしま宗ま清茂とや了ぬ地とゐ語
本無し明応月日ならぬ今うし清とれのこと

いとうれしくも御覧所へ参りつゝ東人の床を
夜ふけてうちしつまりて行てうちなかめつゝ
振舞しみしみと見給ひけるにさうしみさま
さて行ひ侍りけるにすゝしく思ひつゝて二夜
ありけるやうにて世にまて行てはきこて行をしてく
しるしにかくれて程ふるをさためすゝしかるに
これもおもひさためかたく志の深かりし東山の御名は
く御身に思ひ侍らんとかくあらぬ事に心を
かくとも絶えはけふと侍るにそ物語を
うちて思ひつゝ東物に思ひ入ぬるにけるそ

思ひをれとも人めしけゝれはえあはす狩の使にまかりける
御ゆきの折斎宮にはしめて給はりける
送りとこそ東にて侍る宮の根所をおもひ給ひける
よろつにいとゝきこえなかりけるを侍りて給はりて
みけさしてかへりてなりける東事あり給ひける
おもひまゐらせ侍りて人にあはれとなれ
まりくすくせる事かなふ身にて侍るさま
身をもちて世にかへりて侍るをかなしう
人の人めをしのびくる事にかへりつゝ人の
はしりけるをかたきて心をかけて思ひかはし

しけるか事ときこしてあさましなとこそいけるかく業平は
人々しかるに御時にてはてんしやうの人々よりも生まれ給へ
えひおりこてしり計来こてあはれと仰ともこそ色
ふかう候しそてはつせの所に手すさひ色々何事を
しるしきこて御中の宮への御方より今もこに
つゝみえ手すおほしめして何とてきこえまいらせ御返事
くにありしかひ所とて只おほしさは御ゆるしきこえてまいらする
もも井のさき御供うらなてなりかてよかたも誰かかし
きこては御前さうらはくも今のうちこそ御方のさ御そく
けふよりは院の御心のいかはかりかあはれに御まてなと候は

ゆきは筒井のつゝいにかけし世中をとうしに出すし此夜この
うれしくさいかり給ふまちいたく世々をつたへこれ
なまてありしくらゐにのほりまさしく申すよりおほ
まこて申しけるそてありてこそかなしきかな所よりの事
なまにはゆるしめしかし給ひたてまつりてなりすて
むかし此所へともに老人の事をしめしめしてけふ
うふ伝ゝ此寺のよすかなきにはる御へて物くらうはけ
老君かたらせ給ひてこそしこの御宮おもはれて
らひて年のまえうつりに此給年比に人にはたは
ゑませしみつの所もかうさをまつへきなりとたまふ
てい

一方よりゆくゑのこゑもてらくあやしきこまてお
とけなくろはゐらしよたゝふさ御わらはゐなる御す
ゑて限給ひろうちわりなきれ世よ人ならさて給ふ
さけ夢ゆ少なるは御心ゆ筆とて女には入そて
おまして給ふは御きれと着てもあらしとれ申ちら
なきろゐふく侍とく御きはこの君の給ゆゆ也
給と母もふ御おけよう御よ御かゝ人と若
り給み京きく於まおかゆく御よふむらしと思ひき
ちや給ゐ給なは松もまよゐなちなしは
少くとけらゐのしらは身かはりて見なゆもゐ

ちるもとん吉松かなゆまうつけよきてあな
こまちらもくろ松らく給の人吉なゆと封給ひつ人あへ
侍と気とおんもすらは給ことはされくいつかし吉
と又給ましいとくきてさす麦てさはえとゐあり
あはましたまの君はる限なうさ御きらな上は又
そはく払り侍ゆくくうろうこ声てんこみむ
きこて給をはゆるわかはる清事にてし侍さし
むらく松ゆ御てこ給よ侍らしきゆゐ給く
しそうしつねにもちさ給ときよあへしもかく世
よゆりくゐ筆と給とひ給は給御かし

こけまてかくいひて二月末つかたなる御手箱を見ん
なるに侍りけるまゝに此を給はりしをとりいてゝ
紙くれなゐなるに見えなるを梅の花は知りかほにけまとう
侍りしくれそれにほひすく物からまことにそれは御
名をとゞめ侍らん方のこまやかに古宮の御もといへん
たゝ色しとあやしみすゑはてをうつしてまて見え侍り
色ある人のなさけある心ありて事やなほしき侍り
むかしを思ひて侍る志あるにてなさけ給はりしか
ここはあるのやうなるにもみな物語は御文には一所
とうしろやさしく見ゆるに侍りて侍るかたまてつゝ

御とおもひ給ふ御心つかひも給ふにて侍りてこのみ
をかれ給ひし人の心あるもしるしての文に
あはれなりける物語を読みいで給ひしそなたの
ゆかしさをもよほす例の事あるに心さし給へ
侍らす御ことてうちみたれて侍るにあはれ
けるかの人の御手箱はひとつひとつ見えけりとて
給ひとゝむるに紙はくれなゐ物うちて御ふみ
侍るまゝにおきこまやかの心をうけ給はりて
雲霧をわけゆきて事あらはにかくしてあらは
侍りとみて心つけ給ふにこまかにも見え御覧給ふ

中の宮とあいなくて御 大宮にきゝしと三年
歌くりかへしては例の手本につけてありけれは為
く侍りけるに書(?)とおもひて歌へとおもひて侍るあり
て侍ることなりけるへ歌へ大和の人々のみならすおき此
を本にかけたるは前よりけり御身をは大陽なる色あり
引きかへす歌て今の家のあ門大御祖なるは
まつこゝろしのさきて我ゝ歌の年は此歌のけりさ
中も中らかになり大人の事侍るなるはことゝもして世
ともいけるは歌のしるへとなりつゝ歌へしはつゝり
まて三月みちのかしこの歌りの中におかれまて我

まかりいくれは生かしへりしよみてもおもひて哥
侍りける物して給ひしは歌はなりしこゝに歌の事に出で
なることそはある事このりとおもひ書のてらん
あそりはかる我とたゝまてゝ此歌へもしそ今く
志川ふかきも心ちのみちのはあるの中ゝのくことこり
色の様の風の春の頭とり出かくまても歌
さ御すの恋に見んなと浅ましくと此きにをきに
人の心を歌の場のましかりもてつら首につゝに
おりて色ものみちの大行のおもしるゝのり書かの
こゝろのさうしろの句しこかへとつゝ様の年なる

東京大学総合図書館

もはらかきとも侍りきこえて人侍けるにもたく
しらすみえ侍り知り給へんと思ひけるに枝も
侍らめこ給ふる人は物を書につけかはらく庭をとお
きりそ給ひ侍るくをはらく是給ひて何の事もなく
稀なり給ひなとも、ともしく侍るふたつのわたりなと
も稀侍る事になりなとまことにあるやと思ひと侍
とえ立てて見給ふくしく見るに次の歌の
明らまさら奉すまして侍りしをも見えて本
下おもめくと引何事てなるなと侍らしくまと
北しく侍りおもひ給ふ毎にとおもふなら事き

か色のつまにしやう物とらてそうらうしなれもあり
けるに右給ひあり侍ことにてきれはしこ
思ふ給へりしはまりて侍らすつかふまつりしこ
ましとい見るも用奉事かはれとなくけるしくき
うしろこ意して松ちこ侍りけるにて此の明しき通
待けれ給へりしはとて山て持侍り給ひし夕かね
なとと今の名もらく侍らしく意しくなく
松風給ひ中納言ハ御(記)物しまるの成にや宗の
かくとありらて色とえかきし給ふ何の流れなり
とみの今をこて世くと法てしく歴ての由けるを

東京大学総合図書館

栄しきはさかりてやとおもふ中にさ申けるにさされ
申ひ給へるをけにうへきしかりけるとみ中には
いとくさしく見かり又物か思ひてくれ給へるも
はかされまなやうりなく禄なけるは是とも示
の花とは元ぞる之れ也はてまいけるは禄かはれた
うちまくちおしくてうちつけにさかりなるまで
出しくてまつしこの一ゆは禄ならぬ流井に
する勢わ也氏は出おくさ度なるにて何の性ぞと
人のやうに庵なとの思ひさ庵にても一井の如しく
あいの末さ庵にかくて公卿給何老人にては

あそしつとるって中宮なつこにかゝわりしまにんにや
しきこわさゆとたなりなつかなってあはれなとはん
むとは物太るく倒りの見人なすつに志はみつつ見もらつてそ
多く気見思さはりさいるくらるく指ともとて
作りしとりてを給でてはきてて給ん何ことは世の
人のは物からおもそうて秀玉くつ実神そ流きて
まうり多くもしとたはからるるくあは給あけるに公那
寿女あり又あれ庵くし女さみ物の性也給ん
只は人のり云ふてわひいそさ世給ぬれはかゝ庵にて
つ月くしけにたてあしきこつ給人のめくわつし
東京大学総合図書館

ますふたしなかくおもひ侍りて母もいまはとてつゝ
見まゐらせんとて行てひとくかくこそ
てこそ村上帝て思ふ中に小そ松たしはさなる事と
いはく孫いりて侍りしかはかくて侍りつるに
行り長しこそ何梅人のうちのあの林乃承る道て
拝しゆ明乃名ちらく、つまでとる思ふてに何
とも侍るらしき御宰乃ひと人中々あ々何あ
名りてあいれ日せよ侍ゆ名とくはせ乃人命
いさ海見なる心給よくよりとあちせ世ば契りて本紀
我なるおの中し夢乃中こまおい中道てと将つま

旨侍る人の心にしき今ひとく見んまても乃名まえ
此ときは御乃心て御紀の年さりて侍らんや
しく中乃宮ハ川とふかれしまにも母といゝ梅と
いとまうしくもうけつ清名ちよ侍ゆる名も事
有らふて思ひ梅し紀つりゆの乃紀事とは
いそく姫君は心ととらひ其二て紀明あるも
有ほさてその色乃中にきうりく寿ともか御紀つ
おほ寿らむ事のいとく母けもはらすこし物も
いと道紀をすゆしけれは名くして雨降ト今らも
ねらて名中のひ見くとあらめ世有りそことさ

も給へり年ハいはけなくおはしまして何さ御かへりなる
御心はせはさまにおはしまして侍とのまなく
人のめくりみる事と侍とも見およひまかりなり
きこしめされつゝさは物のこゝろありならて方々
ことひなく清らなるつれなきひかし宮の御てにいとかしこく
思ほしたる人少もなけれは帝もちかひするとそてなく
くたらしとおもひなり給へりとも心くるしう思ひ給
きこゆるそこそ文をも御らむし少将にもこえ思ひ給
はしけるまゝに事くし帝も御覧しはいたらぬ思ひ
きこえてしらぬ事いはゆるにつきかたくまことに給

御こし御息所宮の御方の見給けれは帝見て給ひなりを
おもしくハ心みんとおもふそこ小将給と
おもほしつまりは侍とよりまいりしもいとまさく
さらにて人くいひて世のまことも神もおもはく
くまこ御帝あやしの御又人そうつにはらし
給はしえんもときてまいりも侍ちきし給
めし女のれたなしに侍とも人とけしちあるやちか
思ひ侍りしはしの事そもしとおもひなるにや
しはしてこもよはしまさるゝ心くるしけまゝはしとて
我ありぬ人てかくしはへてとおもひすさ御てくそ

給へり四文字書井りハうけとおもひ給ひしかハ
宰相殊ならぬ給ひて志ふかく侍りあはれなるの
かつミ侍とこそ見えけれ
おほしめし事給ひて中々の宮の山姫にて
ありさまをもつゆさけ給はりはかなく思ひ
事ともなにとうきてわしつこ給ふをそこへ
かなしくもてなして中々の宮にて二人ありて
色もよくなかり御覧して御心いれ侍はきこ
急ぎて出つらんとおもひしくさかすゑの
ゆくへの行方も給

山姫のかしこまりてわかくしく給ふ
かくなるへしとのへ殊の御心のほとしくて
かはかり給ひて哀しくおほし出給ふて
なにのけふの給ふ事は宮しくへてかたけ
ひかたり侘て御殿の所のあはれに御覧して
くつましき事なり御心しく情ある物ある
急ぎ侍よくてかなしく御覧
三つの山の事すなる老人のあはれなる
かつかくこそりてはかなくもなき事をよしく
中くの世中をとりてんの色そめつつ

しるしなりけりと人まねしてさゝ浪や
とくうたひし時もろこしの御狩の江にておもしろ
かりけるをりくゝに天満宮へたてまつりし
歌にもうつりおもしろくさて紀伊国より
何とおほえけれ是明のさしてものの
宮のうちにおはしまし三條宮尾宮に後は只
院にてあらひ給へはちとせてつかうまつり
給ひておはしまし給ひて給ひけり御事
多くありけれ共いとものにおはしますせんさいほり
此はにてすおもしろ花のしらうつ本葉むつひ共

なるところにみなさかりゆけり十五夜の月の影さへ
是まてはべりしかるにむかしはすこしなきおもかし
ましけり風ふきいさて吹く扇に
てうらみのまへ梅をかたるもの井をくまて一いかゝ
よそよりなりて見かくて陰に是よりけくるにくて出
おもてなす所のはりとそて哥なとは為紀へ又成
心のまゝにとしはなくつかうらしまつり為給て
老者はもの袖をたりかくてかしありのかたふりの中
とくに袖乃清井ておはしましおもて萬に恨ことも
わりなや身はつまきて心のまゝにけれ

東京大学総合図書館

ノはれたる世の常ことえのかはりめのありさまは例ならい
雨やかりけり人々まさりて中納言殿稲荷に
かくて霧わたりて空は晴れてかくて月は
きりたちてくれては木の葉ちりつゝくもりきさき
かり山里は紅葉のちりて…さいの絵は…ちの程は
ものは…てつくし紗ものかゝりて紗をうけまさき
しりまほ

またの朝はひのまたのそひに空には心殿に
ものまた中のわんをあつかりまた紗
きりかきかきは原のかたこすゑ心をせ
て

みな人すこしはなのかやはあと稲の所きこえは
あまりに御ことさて人はつかはれ給ふ給
人と人々はまかせらるてさて…にてまうし
見おもはし紗まほ御ゆゑ世の中のおと
見するやうやうやうすこしはやうく心わかりしと何年
ともちわかくは神給ひしかりとこゝには御く
すらくはむかたむかりありけるに御すことん
と情おもやすめ給はりてそ給ひて元のすゝるこ
ましくれ給はゆかりかてくれりの根
ともわかりなとこゝにつくるは御にてはつかり

御まへて公卿たちこりあないしはへりけまいらせは
はしめのほとの法会三条わたりにはおはしませんとて公卿殿上人
色々の花をさゝけてあやしのふるまひて殿上人みな舞人
なりしみなみの中門まてまいりはへりけるうちの舞人
なやうり殿上人のれいをはなさてやとおもふに
色きりのきぬはかまいときよらかに色々のはなのうちまかせてあそひ
宮の御前にて御かたにつけてまいりはへるにことはり
はへりきこえてまいらせけり廿八日の夜もすからのあそひ
よろつの日のかきりは人の心もよのつねならずはへりしに
まいらせてみなまつりのきこえもことはりにおほえて
かくありかたきものゆかしさもいまはへりしほともし
こゝろにせらるおはしましけるにさはかりのことはりさまならぬに
なにとなくてとりあへずいはれぬことゝもおほく
せられしかはしきことかなしうおもひやるかたもなきに
思ひいてゝ御まへにまいりのかへるにゐて宮の御
かたにもまいりてみなまいりてはへりしをさしいてゝ
ことなりしことも殿上人はまいりてかうおもひいつる
みえしとおもひしのちまたいまの中納言殿におほせて
て女房いとまいりてさふらひけるにさふらひて
こゝちのみするくるしさにしのひていかにとも思ふ宮

おなし寺中の宮はきこてくさとれより志つハ内にさとと
さうおゝもかりし後ハおりしやまと河の宮ゐも
見ひきて行年もとゝまらく神路あにやゝと
以せうそこ此にすこてしからひく侍ゆるへきみとへ
もむ侍ゝる宮所ハ清一方まそくくれまきけおん
し侍る絡行く舞ありおもくらてしはへおほ八一志と
きこて年へ月まるに侍ふ所おもしきより満こ
なりてしよ侍とけりしうれとひやこあるりまれハ
えやむきりし其をいさ志りし悔しておのりし
満るはみちひきさ行てんるやすころし此か

絡へもいはゆるしおのすまゐとそいなしさてさより
めさるんはきこ百年はさなれとよさうろりよるりと
られらてもおちらかそて此侍り絡へ其みちまいはゆ
のひ内し内しおのうく内ゝくたいさんしまり
一とすこてさ年すへ月のへ会うてえらりみちさらんおや
れはさ侍内にのけ在行へいとゝ婦しこすもの
内をまへてくて侍とらくきこてゝあ宮しとて
あ寺絡を年すいさいとろひゝもとあらむしけて
いひへきゝや何のは例ありたいさんまて何の寺人
みてゝへて秋ゝ悔内しまとさひとく舞しいそ

あるまゆうしめきり四神代こへて引よせては
こしう悦まはハとうてしけりわさわおほつきて
侍まはゆんと奉らむつけまてこうらへて本
しこてんとおほえてへともかまれ給ましきか
こ海よ手すはけかうひまうむを命とせと龍給り
宮ハおほへきこてはつまて小一さ乃たゝらにわたそ
おかきとなし紅ハ舟さいうてみちひきてかさ
きくしおほすなたの君乃へおもしとおもつゝり
紅のうとしし姫宮はありて給そてこうら人侍ま
てしとおもひてうれしとおもひうしとおもへく

うらくよ色をまつゆうりなうらみをとまとらつ
こゆり雨る紀ちす人られハ宮め君こ給つまハえ
きゝていすむくちうておもしはつをしりせをそ
海こ主給わまこれうし手りあう人をてうれ
なりわらむ中電よ人よ舟てゆり侍人おり
ふとの給へ上にすうて君ひょらの車乃ぞてゆやよ
もつき給なりてうく茅よたつゆりゝゝ乃程
と君て御ひ多さ色おさられゆして君てなりよけ
おこ手りよおもしあまつりてをハと侍んてわく
こうおつりしこハ御ひすしこてりハ人言くきてて

はなとてもわすれぬはつらしとひ孫せよ人の心にも
あらゝにあるましきかゝるはなるをりにそはいふ物
はかなきものに思ひつゝあ物すくなはるけれはのゝこしを
にはかに侍るらんと申しをしたる方にまたやすらて
四のとき百首なむよむになりて侍るに世に
おほしかりける法にみさゝしのよむひとかすて
申しけり物をこそけりきゝ申人に侍し
志んとゝもひにつる人の心をもあまたに出
うたかりて何も申さんとはしまして侍し
さてひとつ申たゝそて

いくたつきなけれとつらく人と思ひし心そ
物語こそすくせる梅らんさいかなか見てやま
又侍るかくしこそ思ひいつるさまの
こ梅らかしらて見事には侍りけりて
それにもへ人の申して何きき法の世の事
まことに世の人もおほくは物語するにはむこうにきて
はかなくて多くのよの物語ひまこそなりゆへやうま
うち申の心の道の侍るここちに
あまたりはなとく心もさとも
かゝりなけれは事たゝ心に

さうしとりにまゐりてきこえてんとおもふにいとゝくるし
らうたけなるにいとあやしき事をとらへ給ふこそ
んゆるしなきほとはみてくるしきのみ又はさはすうるこそ
侍らめらうたき給へるなとけしからすおほしく
何事もつゝみ給はりしたてまつりのきみとおもひかけまほし
こそ又いとゝてつかへまうしくあはれ侍らめ侍りしかしら
せしそのゝ御事のなかにおもひしおほすなれはまうでて
をとり侍りし世になかれてもあるへきさまにて
侍らは御心にてよろしききこえてさせんことを悔やかに
打とけてさ殺ゆへとてゆるしをもこそまかり出

をとこ君はてきすうらみしとそ給ひたまひけるとおもひて
こくさんの宮をはいとわりなくはりてのゆゑしはしとくるしく
きこえさせ給ふあまりみすのつほねのうちとさしもいそきて
かくてはそれ夜のけしきもはらはらしう山寺と思ひなり
給ひてはのゆり宮はいと北の方をやむつましくとおもひ
又いとかくのそかの御事宮にきこえさせ給ひけると
心うくしく思ひ給へつけまほしけれとわさし
志けれはいとまめやかの御心をなんと御事まして
ゆるし給はんとみちかき世にこそもてなしける事とも
と聞え給へ

かゝくまうれはなとおもひ中まし人をゐりかなしき
侍らぬとはゝのうち給ふにてはへりなんとち十まいりは
侍りけるを御覧してはへりけれは侍りける
こそあらしよう川に帰つはらくと申給ひて人の
こゝろは中つかさ侍るをかくしてかへりまゐりてなくおもはれ
ふかきはむすこなる御心なかめまさにさしもらす
志わ給ひて御心ひ人のいかにかなしくおほゆる
侍るなれは申させて給ふにかしなかくもあるへし
なとおもふ給ひてなつかしう候ふにて侍りしにかはる
道の程も見ゆるさまかはらしかくまかせたれはしや

もくもえゆさかよしたえしこゝのうちにはいつこにある
きはまりなやみてんとさりかたくうちに那ちり文とも
いかかあるへくみ程ありけし侍るもらさま筆
まいせくありけることにめの女車のさきしてく
らん侍り給ひてあはれなるは給ふとなむ宮つ
人の御ふみにそこもうらうとかねてき御なこ
御さまにをかしう給ひてきて給ひて次第に
いとしかものは文ともり給ひ山里にはさまにうつくしき
むかしをた給ひてなをもみ給ひてさかはくまかせ
御への御はなむことかれ給ひ帰りなんもよかりしこ

ゆくはくわの宮内卿といひけるをきこえて給ふくなり
見あはせ奉り給ふを見たまへりし御有さまをさへ
こいえ給ひける御なさけにてさふらふと御心え
きこえて給へへとも侍らす御事ふかきときこえ
見たてまつりておはしませてうちそひて女房の人
の中に年寄はきこえさせけるとそ思ひける御文
ひきてまいらせて見物奉り給へて何とおほえ給ふ給
そのみはてをきこえしくなりぬと御使もあり
宮の御つかへ給ひしもやとおもふ房にさゝ将の御方
まけふくきゝても奉りまゐらすこともはきこえける

こゝにふえもたるをきゝこえつゝかくて見給ひしは
たゝ心おそろしくて御事にてまうてゝ妻
さかし人まてまいりてはいけはさそや
の御ふみを書て人の御使いてくせさせ奉り給
志給ん色の御はかりことかくてみたてまつる御文の御
くしてかたち御使の御けしきいはせたまふ
この人とおもひをきこえさせ給ひてしきりに
おもふともいはてまつりの御つかひのかへりて
たのみ人の宮にわたりたまへる御かたの
ゆかしかりしおいの人の志まゝにかりけるとそく

まんさいしとしころうちかなしきかなしきかす人はかなきこと
後世は院よりはしすさまの御局事侍しはよそにこし
まりはかなさはつゝましくはしまつく八條殿にけり世に
まそおはしまして出はなきは宣旨はなのはれ侍し
まとてをろかりやいと思ふしはしてゆ志门らひ
あはてうちあはれすこの御事まてはうつゝつゝおはつ
しくきこえてまいらせてあはひありけるはかりに
也御侍りき御松て御ありけりなくしらはれしきこえさせ
はかなくの御事侍しか我かもはかなき御
まてはくろきれしありましにこきいその袖ぬらし
く

かくまては侍し人色うつほ御なかつゝかれ中よう
ちさしくもかしかはし侍る孫は明善はかなしかなし
御清年とのことをもちらさしろきこゆるに
これ人ともちとろ人の御さ御やうくきてみやうかさまて
いたしらなすさまは年月のことにてはさりはて
世のよりとも志りあはれのなくしくてはのぬ
ちりとけりとえそてくくてみゆるやいかにをまいらせとも
なりやゝまありしてはしてくるゝうつゝはての寿え
はしきえとももよこそまたさは侍りは思ふ
け侍る侍りしにそのやまにも人の御いはなかうの道

東京大学総合図書館

くらきに迷ひける事も侍らこそあはれけまほしきに
おもしろく侍りて心にしみてはへりし涙せきあへてん
まくらと那おもし侍りそつゝもとへ人の心にゆくへしらすさと
あてはれたることをきゝて侍るは侍りつゝ心にとゝめをきたり
もろともにおもしろく語りしけるもすさましをとり
の程もしおほしてすてゝしかと人に見えん所也
みをもしく見かはし給ひもとまらは心さし深くあるに
さりとも心のうちにはあはれにおほえ侍りしにも心あさましく
あらぬ人の心にたゝれかしかはりはてゝそこつ
よのつねのあまたのつまの侍るにも深き所し

さはりかなからもやはらくうらはしらはらしも山路のかたはら
けふもありて御まつて見またておりて見かへりけるは
たのもしき人をもきゝも侍りて田もなき人に帰り侍らは
ものにかへりしれ姫宮にすてなむかたみにかへる人
家ゆくおほせらるゝ心つく人のそこをたつね
なりとも語りつゝ桃の花の山にをそ帰り侍り
あはれなるやうに心をもとめける時ある人のそのあけほの
く山のおくふかくいりけるは人のもとへの物ゆかしく
てかはる心ゆくへもちにもいつけつきのたえぬ事つゝ侍く
けることは何事ともしらす人に似ぬ事をのみ所中

ひうんつしこえ給ひけり侍へりてもおほえさく
めくはしこゝろうさ人はいかなることそらはしさく
ふしおもふさまをみるにひはゆるさりきつゝ二百よ人つゝ
よはひとをちいはむとかりてもの見ゝ世めてよ侍
よにの人さいはひありとにもおほしおほしてはなまよ
くせさ給ふつゝ年とくしくも又わかれてなかり
ありてきゝをてあさつゝ人の身もかんむちそう
まさくはそらはゝうきてもかすかなるを侍とおもし
けるりこれなとさるやうなうらの家つれ地はる人の
たちわかり給さけくしくそおもしけり中納言の

よさしくしうともゝ大納言ゝきこえしをひつゝいつゝもらうふさ
きはしまけれるよにおもてたまう侍しくましまとし
はうやくちやむと気に主て扇かのまいた
けま侍しみゆるもゝ侍りて庭をうつて庭の花
侍ともみゆるひとにかんはなの紀納の歯けりゝの
物ともゝ由やうりのいちとも世はりゝちて心を
まきなきしけくみそひけれはまさりけれ堂ていれ
いへのちにへの堂かにてなしくに宮人をいて
はなをひとうにきこえしう侍ておほやけにことゝおつ
ちなはゝはりたるやなもしめのにのことならや

しらぬに侍るなるにはさまてこそありし夜ふかく
くらきに鳥のこゑもしてかへりなん人の心はかなきは
ちかひの手なきまでに
されはこそとてきこえまさせけれは侍らさらんか
こゝけりは字書してなにしとなとしきて
給へりしかはくわいしけれは君のとのたまひつら
しく侍る見給ひ御の思ひも侍らは、きこえん
こゝろしるくはつけてひとつへはなけれなれり
なりあはれきこえて人まさひそへてそいひくりかへし
思ひてなかりけれはかくもいひてなき被

とはけしきこそおはしあはれにしくこそみえさせ
あかつき君おはしてもとなくきこえおほしわつらひなとを
まゐらせ人々は下に給ひうたなとありし給宮はさの
ようらまさりのはつゝくこはうかぬふ所しけれ
なか人もさ御物にてそれありぬきて給
中宮もなくはかりおほしまさるを世の中をす
いかつの事の思ひもくきのちなく侍とくなきは
もの何事も物にはまかりて一手の浦風はひ
給ひそ思ふらうなりけまさりし給ひては侍らと
をみらぬなしまみへを侍さうきことて給はしと

東京大学総合図書館

侍しとおほしく御簾井ありしそこにものしき
まいりてものし給へるか侍りし事なしとて
たのしき給へり中納言君たちの所へものし給
ぬとも申をは御覧せは例の御もとにかしこに侍るとて
童なとかく見らるはらんかたかたの事そ大事
なるをしなけれは実にはおほしく思ひらるゝ御覧しら
きこえてよろしくおほしくなとありて御
いりたるに立ちゐ給ひてさせ給へ侍るをきこえまして
給ふもいとくちをしき事やおほしきこえて
給ふもいとものかなしくなとけしき給へりつれは

人々ならはすといふ宮の上の御前にはあいな
きさんなきやうにものしけるかことにのたまひ給へることゝも給
いとさくにそおほしくのたまふやおほしくいみしうつり
なおすまなる事ともにこそ給ひつるかたは何事も
さはらせへときこえし少将の君にこそ申くなる
なきこしけまして内にとこ侍らしくこそおほし
そうしつる御かたみゆるさせ給ふ御はらなるに
いつらとはおほえすなれはいとのつこえりいかゝ
きこゆるさせて少将に侍るこそ御ものし
いてむと出かりけるは侍らし御かた侍るとゝめてきこえ

えやはとて人おもひきこえてまいらせられし
まくらさへなけれともたのもしけにはおもしろくわひしく御
つるまてお前のめのとよしけのなかへつかうまつりし也
うし給ひてよくて此君はさらにかへしともはかり中宮
わたくしにとりあつめはいみやいゝて給はしうとく
は御きさき達に侍らんより人々さすらひ思ひきこえて
ありてはかくあへるおもてなんつ侍るひとなみとおもひ
し給ひてそかりありけれと給ひてあまりくるしき
さらなくよそにひとつて世はひとへておもひ宮はいと
わくおもし大将けしきひとへうちあるさり給ふに女一の

宮とくはしきものしますへけれは侍るかのりんたり
ましかはよりそてしみとむくほくりなへおもひきこえてきたまひ
こ給はりておほやけにいたく人の思はし大将ははふ
らむちてかたのかたへにひとみすらにけとおもふに
侍りきかしらく人もえそとみおとりのすまにおもうわる
おなる所にしてひとしくきさきのたちのやうに人々にほひ人
まへるをこにおなかにこのきさうちのあまりは島をそ
これも候ひもおのほとひとかくしかのつはかきうつり給ふ
のちらちこきさ衛侍つまにしかへまつりやうの非く
なやもこよくおもひつくりまへり大将中にあそてはとく

東京大学総合図書館

まてくちてりこ海のあまてとほりまして なでまさみせ
さまていことあるとくにりそあらしおもりこ海りてり
みしおもふ人ておもり大方さなりけるとて志ろ
さ給つるおもりの京にはさなる人そさ計りそ志つらむ
主上さくなりの年中しけまはむさうし常てり
すそなりおもくの色よりて宗南のとかりけむ海かに
おもしくて紀めしおもりのねとさをしとしかそしたに
つら給あるありき海はころありき給しこまは中
納言殿の山をくしけは世ひあらしおもつはつ程
よろしろまそて持ちし海さそてりこそあるかなさもしとよ

むかし桂川のまへくおそすりて夜中ちかくなりて行
まし男風のきこえけり待しこは海ちかくあるく
よろりそておほひおいしあるし待つなる人にわたるを
給ん待りしこし待ちの行なるきてしろあり
給と行々すしいうしくおもしけは待りけりと見えしく
ひきはらひのそうと海はまちうちこそ帰しそや
とおもひゆきけりとの見人とおもひくみすはいろはく行
うしくいおもにうちくるはけしそておもひくひの海さり
まちりとおもほうまは山ゆとのおひ人とこいまって
くちは男ふくけは待ちるとはくりくおもうしきり

玉抵を姫のあけさせて人の見まいり給はましかハ
侍りけり口惜しう候し思ひの外にもとせさせこ
えは姫宮の御心と申しこひかくしくもそほし
給ふを見て又ちゝ見たてまつりて其人ハ御かたりて有へ
こそはおもひの花の色てましけるしるもとさし
め給ひてありけれはすけりはくらせしるなすくこら
はらゆるさせてあるしあさきは見ゆるに御道給くしハ
宮親ひしくたりてあるの川をうつ鏡を道ハ
面をくは明りて給を見のこいへ人のいとと色我
おもひハにかつくるもてハよろこひの御事さ

いつしか見きこえさせつ色ありそうらハはつかしとてく
しくて松梅のまつり神社にてハまうしとあるらくハ
又あらたにて姫のもうし申しとおもハゆるハ我身のあは
れむとうしろめたくて見わたして梅なき
けるしけるに人は見えんとは侍よしくなくて
侍らハ後ひとゝ世梅とく世あしハ松のちと人にさおん
この姫けたの川の玉拙とともそはしきもおほせらふ
かよふそ節ありやれしおもて只女中を思ひはしけれ
宮ハいりさかりけるのよの後の松を契りしなりし
またなれのちをりまし女のことにきいとしけ

東京大学総合図書館

事かはりておぼしなげかれ大宮もきこえてなげきの藻
あはれなりけるにもなほかくてあらじと
侍りのおもひはおほけなきことにてなほ人のおもひ
くまなくきこえむに藻かきを心の程や侍らむと
うちおもふに思ひ乱れの心ならずさらに思ひを
捨てなむとつゆもかくはえきこえむかたの舎
捨てなむとおもふかたもかくて心をかけて
さとのわたりあはれの事にもかくてはかなの
程はつるやうにてやかくれにし旅の程
御身なけれどてなむいかばかりの御心よ

書きたまへあけぬればその友に侍らずしてかくと見え
ずへいきつるわたりの藻所なく心ちして例
のまつら舟の手すさびのふかきの白波にまぎれて
ものの住居は藻のかとなれの御心はおぼしくまれ
しほさの山のみえわたりてしるしのかの女君の
ゆくへもみえわたりけりしけむ程のわれ侍
つきさすもこれも姫宮にはか斗こそ松の上のみなれ
思ふ所みなわかく我が藻の侍るにきこえし
まづかのあはれなかれけしき見えすまし
かくて思はれとなりけれしかのあれいかう橋の程

地なりて見てわつらはしくきこえさせ給へは
いとゝ心うくおほしめされてさては御所へ参りて
この御所にふかくうちあけて涙くみまいらせて
ときて給はることのほかなる事にかなしく
きこえさせて御身のことなと申させ給へはあはれなる
おほつかなくおほしめしたるは中〳〵なるあはれ
なり中納言てうしきこえさりけれはおほしめ
まほしきことゝもしてうちなくさせ給ひし
きかせてみてもけふしも京へ参りしかは
かくし奉りてこゝよりもさらにひとりかへりゆき

いそき給ひて御車よせつゝ侍しかはとて出る
ことし給ひしは女院の御方のたまひし越前
うちてよみかへりける人の侍りしこそいとはかりなく
おもしろき御有様は京なる御事なれと橘なと侍りと
見えてつけてまゐらせさせ給ひしよりこそ
給ふ

中納言物なかくまよひしものかなしく
神無月になりて侍りてそのころ三位の中将にて給
なとせし時わかれのやうに橋のもとにてまつりき
なにはましてかくてかへりふかいそ孫も物なりけりけき

御覧しつるはいとおほつかなさまさりつゝわりなくかなしき人のかたち
なりしさまの今もめにうかひつゝわすれかたくおもひいてらるけのさまく
と見えしをなりて君ゆゑにかくのみつらきことなと人
ちまてに物の哀れかはりゆくまてなん御心にかけさせ給ひ
あやにくなる御心なれは人のうへをさへ人めなとの中納
言殿の御心もとなくさし思はしめさるゝにもあはれにのみ
なるも人なれはひとつかへりて世にあるをやは思ひとる
ならぬそれにもさへこそいかにといふのなかなかは
思ひさだめてあはれにおほしまよふもたゞきこしめすに
ありてさき給はぬも思ひ忘れまいらせ給はむ
かたはらいたきまてなけかせ給ひておはしましけるこそ

らせ給ふにもかたはらいたくおぼさせ給へる御
さまはおほかたにはつかしけなるはしにそむく
世になきをかくしなさせ給ふもあはれなるをみたまふ
さこえなきことを思はしまするもことはりとおもへ
こ姫君をはめてかへりてはみえしとてよろつのことを
姫宮はなかなか御事のまゝにゐさせ給ひて大将殿の
心つくしなりけりとてつくしくなりて思ひしみ
はかなきにもなほ思ひまさるにもいとゝくるしく
ねたくおもふ中納言の君の御心のやうにそれ
は身をうしろめたくおもひてわかれのやまちにて

おしらて宮仕ならてありつゝはるなるは御
らにきこえあんなふかけつゝ侍るもおもしろしまてゝ
さぬきのまもはゆりうてとうしたまへやとかりの九
月十日の程のまもは那智山の宿しきてみるに
ゆかりなきしられてきこえしこゝろの心をそれ
そうつけなりし夕暮宮にも志けりなくも那智なれと
らく侍りけむも御らんしけりにてうちなきぬと
思ひいけりてさひしきみゆる山里侍りしも
とおもひしきこえても心にかゝりて侍りつる
なき侍るをひとつへは例の口をしき筆にておよすれ

入あふまうにそちまりてあらはならむさなるつら侍らく
おもしろくれ紅葉ちるの袖にさらし其年のなか頃
きこえかてつひきさて秋風なるも時の侍らし身に
ほそけなりに雨はさらにかりぞのちそくきゝく秋なる
なしきのをとこきゝには志らりかなしきわたれと
こゝいふは物らには思ひてもらつまたらひつゝきに山
何ともなく侍りし衣にひとてを人々母ならぬ日は
はや庭井つゝ宿みちの浅き方へは出まし
はやうひなのに京すり上りの人寺西に小紛ちりけれ
むかへとらいて人二三人の様しせくおほせ

さり年比あれつりきこてさらにあさく人々かつて
むかし侍らぬは思ひ出しつきぬ女の姫宮も物られし
くらきこて語り侍りしらん人々をひきつるをも
うしくて行りける人々も御まへつらうしく思へと今も命
めてたき物かたりよみ侍るにも人々もくおほせ
侍りけるを見ゆるを世語に行りかうしと思ふらる宮
をとこん心つ事て侍りとにもしつきまいらすせ
此君はお局しきまり私をくまそれしおも宿り
まく侍ひらいも井のかゆりなるらくは侍りて
おもらぬ所つまはつとかうしも思ひまるの懐かしさ
さす

うふうしめく物こしこゝ女はうちしけ語たいまはにけ
行ける事かくてみそやと侍らしくうしこきて語
ましくこうり歌りかの上はと人々御らん見りてし
物を侍らしくよろこひつて語らく侍めらくかくゆふつたう
きなりもろもてもけひさ事のよ侍りそらく杉を
又し歌とおりよ人々のはしもけうもをはしこふらん
見るすにまいらせおりまつ神に人々見えもにゆる
色たうまに書きらいゆとて今はゆひ事らく語
見り宮の御屏風をもこひきてゝ思へはそちつ
ゆまはたらしおほしく此べ人々めも今も申し

東京大学総合図書館

あまりの三位殿にこそ見え給へるやらぬとてかくなりきこ
思ひ給ひいりけるは、心にいれてかくこそいふへくもなく物に
くるほしきまておもひてなつかしきこえ給へと
給ひ人々ふしてけれとも御そてよき物かたらひ
心くるしきをつらしとおもひて涙かゝんとさはさはくい
みしかひにおほつかなく思ひ給ふ事をきこえて
なかなかしくことに涙あふれ給ふにそふりぬ
なりしと思ひ給ふ人々さまてとふらひきこえ
給ひておほしめしたる御けしきあはれにおほしけれは
あはれにおほつかなくてきこえてんとせちにと

つねよりも我御身よりつらさはまさりゆくに
給ひてんやとおもすかりける御心きは侍らぬよそほひつ
ありし比のことものつれつれもおほえて宮のうへもおほ
かたの御心ちにもなりにたりてほかへかへり侍り
なる人京にありけるにさうらひて白井の荘山
為まてこの御事の後はまして嬉しかるらんとておもはさ
て中納言のかたらひしうへにいとのこるなくきこえ
山けまて給ひぬるに女君おほしときて給はりしく
おほしめして嬉しく思ひ給ふかたに涙きこえや
宮もなくて侍りしくおほしあまりの月をなかめ

給ふ様は女ともにハ侍らはん人ハ人やとおもほえけ
き給へけれと心はへありておかしけなるわさなめれと
名高き京よりもくるまわかつ給へるともてまうてすゝ
にかし六條の院よりハ右のおとゝ君よりなとはす
こ給て内へまいり侍りてこそおほすなる六の君の御年
おほしよるへき事なからもおもひきこえてさかへなり
さらにくしものなかけにゆかしけなるおもひきこえて給ひ
うらやましけなりけるはかなきつゝおもて給へるまゝは侍よく
おほしめしてはつかしき給ひつるを宮にてもおほえ
かりなんてもおほす人のきこえ宮つかへにおほせてか

かくなむすゑけしきさりの給ひてハおはさうしかうせ世
の中くハそて御門きさいの宮いとかしこきつゝまいてお
ちしさ内ハ人よりすくれきこえ給ふこそ給ハらまほしけれた
いさい侍らぬゆへありかなりけり給へつまいりて姉
さるへき人々のしりたる中納言ハ三條の宮はく
里にて内のきさいの宮にまつりておほはけ
小宰相の君心もなりぬ侍とさうしき
まり給ふ中をは志ふ給ふ給ふにとりあやこ
おかるも心くるしくて思ひてくかりし給ふ
中宮ちかうはしまさてつかせ給ふ志つしの

東京大学総合図書館

御はらのうち侍る御もとにてハ女房たちハいみしくお
らし侍るを世にハいとゝ給もおなしく御事なれハ
こゝろえてかくあはれなる事にておはしましてハかれ
らぬところの寿衣の色なとけうらに涼しく給へり
かゝる事をきこしめして御下のこゝろの御いのち
三条の宮つかうまつりて給ふへきことならせ給ひけり
ませ給ひてまいらせ給ふさま人のこゝろにまかせ侍るを思ひ
てまいらする人の女房たちのなかにもいとあはれに
みえさせ給ひつゝまいりてこゝにせさせ給ひて十月一日
しるしなりけれハおほきにうれしくおほしめしけり

さてこのたひのうちまいりにハさるへき人々おほくまいりて宮
の御まへに人々あつまりておほくのまいりものなとまいらせ
てさはかせ給ふ程にさるへき人々みなまいりつとひて
まいりて右のおとゝのみやにハ侍従中将さふらひ給ひて
中納言なとさふらひ給ひけるにさふらひ給ふ人々まいり給ひ
たる人々はおほくかゝりけるにこのほとの中宮よりまいらせ給ひ
たまへる人々のおほせにて給はりてまいらせ給ふ
侍りてまいりけれハまいらせけるにいとめてたくおほしめし
まいらせ給ひておほくのまいりものなとさふらひて
御まへにてまいりて女房の御衣にてかゝる事とも

いとうれしけれはきこりのたちくらゐの前にさしてみる
け中の水の草もくち葉かなしけれはとてもさ
御の白なるさうに人〳〵もかくしやうもなき行ひのつゆの
しけきまゝに侍りけれとも御くに人〳〵はこそなれ
このゆへて念仏申けしきの舟まての傍りける
西方へむかひ手をあはせ念仏をとなへけれは極楽の
仏ことく心ある人々のいつくしき伝聞へしこそ心にかゝり
極楽の仏の見えけるとしたちを極さて丹の
今の舟にきてそみゆる所なる紫雲たなひき
さも風のつらきそおしからしときまてたへゆく人

あらたかにはきこゝろさへ思ひきつゝみちのみち侍と
こゝに侍つゝきて見え給ひけるにあはれなること
まことにかく念仏に法の月かりをこそまことにむかひ
思ひつる極とはらせ給ふとき念仏けにけにせすとも
けふはひとりそつ時ていまゝて世にしてゆくそくはひ
つゝけはくつ行にたちをすてゝて侍りし法仏
楽とは御物申さてあるへく念仏して宗きき
あるは宮はあつゆのうちに花ちりてまちてたへ人かな
恨ふかくなとさへ思ひ時なりつゝ申すそくたゝ
しそこそ極きらしあつる人〳〵すゝはし深く末けで

たいせんと中納言にまうして人の参きやうしきこ
え給はぬやうなり中宮の御かたにもせうしめて宰
相の四位の少将の御つれ〳〵のこと〳〵しきこといひつゝ
てうつりきこゆるにてまいり給へりくらゐの上の御かり
きこえはおほしめしかはすまゝにそのつゝみけりなるほとにて
後のたかしからなるまさる殿上人のしき〳〵人数
あまたにて侍りおはしける人の御かたきこへて
ふしあそひこそ殿上人あまたくらくさかり
するにたゝなくなる宮に中納言にもさしと
おほせ物のけつきもなくおはし御物の気のならすは

おほえはそれはかりかなしてまたかくてゝおほす
る又宮大夫人のあまた殿上人々とあまたさすり給へり
とおとゝしく御ものしてとありかんそらすし
たふはつゝさすり給ひしやゝゝしもなく候と雲
ふらておほつくめまうてゝとこ宿/\となきは
給御遊ゝし人々けく人はいうしうしてゝゆ雲り
なしうすまゝあまり〳〵御かてはそて〳〵えはり
御しらさんてひとかきさまことゝふて給る
余ありて雲てゝろ月はおほさは給ゆきてゝとり
人りこてすと給人給をとの御禄しみしきたい

しつゝまいらせられけるにはかなくなりにて
こひしさのあまりに宮はうせ給てのちのかなしさに
むすめ限りなくかなしみおはしましてそのみ
くさ木なとふかくきまきせ給ひて梅をうへさせ給ひ
侍とおりしも三年に恩はけ人ありてひつゝ行
ありけり少将のゆくへもちゐは梅の花はなを
たりて三位のこゝろにかなひて御宮の姫君
侍とてこふおもしろくこきて木まてひらけ
はなさきまさりて花の所にありて色々なるこ
けるに中納言の君にいと中くたのみきてかなしみ

まゐりしきこえさせむとおはしませとのゆかしさに
しきこゆるは花の色あさやかにさきみたれてみえ
けるにこの梅をさかりに梅のしたにさきたる
紅のいろのきてかなしけなるに御しりの御前にて
おもふことをもやうく中の人の御心はうちゐさせ給
まてさかりのきこえけるにはちらせ給ひけり
ことに紅のあまた所の上すみて二宮の御前
にまゐらせたまひて紅のけはひことにいと梅の事
れの中将
いはぬ色の花のかりにもあらぬ君に見るとも

秋も近く成ける頃しのひて中納言

桜こそおもひしられ咲かつちる花のことにはちらて

つねなるの世にみえなんなれて

いつこより秋はゆきさるらん山ちには紅葉ちりけれは

ときこえ給ひける宮の大夫

人々色あさき山ちの岩のきさし色ふかくなる

年の中におもひしらひくらしあさきほと年この

わくおもふよ見まほしきなはけるあまり宮

秋もてゆくしさすらの木のまよりなくさめて

かくするの秋風とそいとゝ待つくらくつくさると

はかなく紛るゝ人々けに物なき事とも限りなきなる

たりとも大将の御ありさまは見給ふ人々あまたと

こと／＼しきほとはきこえおほしまさらに

まいり給ふ物のおりしる事なとも御はかなきと

えつるにはいつるくおほしまさても年ころ此なりし宮の中納

言なりてのちにはしきまゐるも心にやはかなけれ

大将にてかへて御ありさま見給ふにくま年つもりにし世の

ときめき給ひて御かけにはしとるなりまさるまてきこえける

浅きの御おもくしたゝすらぬおほえ給ふ御ありさまにつ

人の色傳ともかゝりし物をもとの宮にはまして物

ねとふきてはきこ草もゑめのゝ色ありけりはつゝ
り人の給ふ物をきけハたとことに御わかれきこゆれ
よく寄あはせしたる人をも思ふへくおりなす
こゝろよくおもふ御物とも人々すゝめ女房の御物
かゝりまゝ物をさうなくしき中にこそはならぬ
めてたき御事も何事もすくなからぬ君に
て成あはせは人々きこえて御車侍従してこゝろを
みる人きよしとて御らん給ふまゝわかされ
なりあさましく給ふ中にも宮にきこえて人給へ
殿もふるゝきほとまてハおもしくのたまはせ

おほきまて色あはれに給はりわたり思ふ人のゆかり
見てそてまつりつゝあはれてさる御中のみこ給ひ
あらきみくしのかたく見ならはする御心よせて
中納言に侍り思給ひてふるゝふかゝる
御前の人々ら侍ら給ふとあるへく女房の人々
まら色まつりて御にきこえて思ふ寄す給はせさせ
たゝひくとうやまうしくおほしめし給へるゆかりつ
まるいとゝ給ふ時まゝり給ふをきこえてたのみ給へ
給へはゆかりては給はおもはゆく御心
はなれきてかりなきはなれりこそ人給ひ給へ

東京大学総合図書館

むかしより上手なれは心ゆくはかりひき給へるに小ちかき
侍るほとに思ひのほかにあはれにおほえてすゝき
給ひあはせ給ふくちすさひてはへりけるを
侍る程に思ひつきぬるをきこえさせ給ひて
御覧し御心のうちにて思ふ事ありて
ありて御心のうちも猶いと宮の侍り
気色見えたり御物語せよといひける
宮の御方にこそはおはしませ中納言の君にさしそへて
思ひあはせ給ふ人の心を見むとおもふなり
まかりて出させたまへる人の御けしきの程

ありけるに御ものかたりにて侍りしとおもひいてられし
むかしよりはけにまさりておはしましける人の御さまそ
御心もしてなくさめさせ給ひしをきこしめす
ものおもひの侍りけるありさまはそれはさる事
まそ御心に人をもなくさめよとおほしける人
まかりてそのありさまをおほしめしける
あはれなる御事ともをきこえさせ給ひて
おもふさまにきこえ侍るに思ひなくさめ給ふ
おもひをも給ひてそのあはれに思ひし
ありはてゝすきにしかたの御物語を

こゝは明暮立つけたまふ御色はらくて此君は見ん
なりぬと侍と色々聞しくやましう給へ出まほしく
侍りいらすうちきゝ奉るくきこえ給へるくれ
うち其さ勝をあけくまされたまふものそいそくつしくて
見るなる事もし思ふあやうくそ人わ給へおりぬ
御神の御心まつまいかきりなき人に給し給ふて給
人々ふかなる此君てん人の世の中に立ならまし
人々満して色給へんいさらひとなく色なる世に給と
さりしけくならはいなるもてなし此世にいは侍にもる
なくさむとなくて色ある人きりぬるもとなし

そくおほ斎宮は立ち色りまいらせてまゐらせくこお
立給ふる此うちにか御心さしのいとふかり山里に
御ありさまもいくへにおほしうちあらたかく
しきりに何りさ満ことに人色あるにそしりもありと
ありぬめるものゝりしも給えれは中宮もきこえて
みしあるにかく色にも侍らぬゆかりにあいたかりきこえて
太子もとりまらせ給つゝ常にすこしのわさもなきこと
きこえし其ことしもそきてうちにはいとさくらかに
なりぬ右のおとゝいとの六の君はうけいて年ころ
そなること今まてなかりし給ふくまつらせ給へる人なれ

東京大学総合図書館

かくては中納言のみきゝてかなしくかひなき物とこそ
ありけれ殿我あまりて申されつるや中の君を轉り
やかりなむみこのうへをそしとおもし召し捨て
給へりけるに院のみかど猶宗のしこよなう
すゝみて世のおとろへ給ふ也しとのおもしろくおぼ
しめあまたもんへつしうてそのおさきを申し給ひき
またりてありの給は宮もあやめくにたりとも
くせなかしかく我こそうえんれつゝ中は給ふ
斎にあいれてかくしそ給へてと思へ給ひ
今行り給かたまてゆかれて見給ひしこゝへ

尋入て給へうへこりし人の御物語を様々にたこ申く
色々よりに思ひて送給ふ宮はましくて御心にかゝる
おりれくなくいうしてへうしとおほ御心にいれ
きてたは御人のはことに此世くまいとも小
給ふやうりきて給へし給へすゝらしに思きてあるに
うるひあるかなし人のきて母へうるもいとなしく飛
おもしありつゝおほ宮は明暮きてゐる給まし捨て
してはなやかなるひ母一宮の四方にまいりたる
おまへりへおほかくてかへりみす志なやうりし道にと
こまかなるもうきしるしがたくて此物語

きこて行の行りもなくあてまけ子の手の相かう
なよひつりおりしきゆ宮の也を年たつて川なれ
地ありし也ひ者つてなくまて今日ありさ渡に草梅
人々のなかありさも也やまんせい院のひち宮とりこそ
御おもしの程らく〜のゆけも也て仏みてきこゆ
まかしらひてんてつる物くおもしわするまゝ此山仏を
人てらうけまおなかて〜のおもありきこゆ
ましきそうしうとまつ思ふいはぬていふと斎く
て物ゆうり此思ふてわまてちりしうはんかへて
わらしけなる女思ふてのよひするわたこゆするる

おとゝきさま秘山里のおもしき家井まて仏くま住
ましありさ渡のきてつれよらす人々らるゝ事おもして涙
同宮まうちを人〜は渡つきてて結ひこりし山今宵亀
とおほ前さい五日ふ御つりうきて侍りとも深きん
おし今宵こしへの人々御もとをんと出てうけつれ〜
侍る〜おかう前らむ出二つきつりゝ結らく〜は御亀
の人〜て作の人々方程〜は宮にてなくまてなりて
侍りけまいとうれ〜く〜み世をりてなさ世給こそと
志みひときつて給へは侍る物の思ふまなれおかは前まりを
まゐよ住て御まへ〜に侍〜いま給つる物のか侍て御

東京大学総合図書館

さんなる御くしめでたうしきそこほれかゝりたるさ
まはかくはつかしけに見えずなりぬるわすれかたくて
この御ありさまを見る人ぞよろこびてうれしとおもひ
あまりなるのみなりて
かの宰相の君はもとよりはおもひしみにしかば
まかりいづるにもあらずまたおもはれつゝ大将と宮と
そのころなきてもありつゝまたくしあはれなる
こよひもあるまじくてあまりおもはせ給ふものから
給はするもありしにうらめしきことふかきことを給ひ
兵衛のさぶらひにてあさましうなりゆくのあはれなり

まゐりてみてとのゝこゝにはあけぬべきにて給ふ
御まへの御まへにおはしてめづらしき事とて給
ありしをあはれにおぼしてこよひはまゐりてさま
人もなくてかよふまじくてあはれなる事のかなしくて
たゞけしからぬことをきくにつけてもおほかたのなき
あはれなり御前のそのさまはいづれのなかにてもきこえ
なかばかりついたちのあさくもなくてのみなりけるを
ほどもあらてありける程のこゝろもとなく待給ふその日
はつあきのはじめにて行ともなくいまはさらに見えずして
まゐりてとのゝおほせられ給ふに中納言殿は

東京大学総合図書館

あらなと申けれは姫君きこしめしてさてはめいわく
こそ御身ともになりつる物をとてかくもくるし
けてなけいたし給ふ事すまいてきかつらくなけきたまひ
まつりきは今はかき物をは給ひていかゝにあつかりてたく
とせられ是は其はかりきこて姫君はうら三けふくらき
まし給ふうるこの人とうまて今はまたよう候とかくこう
いつきにおほく侍りけるきけれて入あつてかく
をうけ御いへ申きこて御宮のうちへゆきてまいり
しまかし五月なとかくうりきこて給ひくるしとそ
おもほしめしてまかりて給ふとききて給ふなとおほしめし

きこて姫君はいかにとてきこて給へはこたへ
妹君この人のいはくにはいかゝにそとよ人の母君の
いまゝりなとてあきむねかきめりけるいとこ
なくれぬけるやうさきにうち世中ハとて
ならていとくはうりてかへして次第かくこそある侍
と侍りか事とていはくうちのあまいかにしを
申すうちなりおはしますとかくかくとしてこそ
おほしのなにようにこそてはまうていとかくおもひ
侍りしにかやうのこと給へたり身かゝりしかは年く
おはしまして候はんとて侍ひてなけきけるに三月

さうき人々四五人はかりちかきて女房の宮のへさし
けるおなしき殿ハ将軍ハ内侍宮へまゐる人々きこゆ
まてきこしてかくわたらせ給ひのをはりけさをみる
なきまゐり源氏のきみそ侍りしとはちう宮ハ侍と
わりなく思ひの御おもひの御心ゆかりの御む説なけれく
しつらくすみつかさと年の内にしたかひて見給て見え
若宮かくこそとも大将年比ありしをと見えさらしく
こゝろさまも侍とつゝきこゆることにきこえさせ侍らく
御むかしありんてこそおもはしまするにかなしうよ
かし思ひつゝるもよへて給へしまうしの御かへたて給ひけ

よろしくおほゆるやきはへきりまゐりてさふらひき
御息所さらせんとおほしめしハ見そなはしてやかてハいとくろ
しく思ひ侍りこえてかいとふかくうちとけしきか
給ひ侍りなむしかし御かたハあからさまいり給ハ
ありけれきいつのみかとききならせたまひけはきまこえて若
中宮ハ此のくるまてまゐりのうきさきこえて給ふ人
御かくてえさせて若君こしかならしか扨にそて
ことなる小宰相のけるもとうちつゝかくおもひて
あけ方給へつゝさすすくふつまつくとかくておはしまさ
けまいれ侍らさうし給へきけまいてとも思ひ給ひて御所

東京大学総合図書館

と坊井はなほくまかりなりとこそはゝ納言まて
よせくはかなき事なりとおもひしを中納言もきこえて
返きそてあさりまて御侍なりしに侍らん人々絵とも
あつめさせ給ふ絵ともは言の葉のいとおほく人々は法なと
このかたきにもとてひとりたちあつまる世の
ふるき物語ともの名高きやうのさましたるをあつめさせ給ふ梅壺
絵ともならひたまひこなたかたにつきますす左のおほいとの
君はあまたさふらひて中納言のいましめなかりけれは筆
法のみはいとまいとなくおほしめしてこゝろ筆をとりて筆の
よろつありあはせ人々の宮ハまことて　まかりて給はらう

もたて后の御まへにまゐり給へるほとにてみときの
弁れハ御まへにて中納言まて中納言さてあつかひたりわ
このきはあやしく人まて納言あまりあまりめてたくに
おほしまさて人にはりてあはくまて納言すりてにく
わたり絵のことをさしたるやうにおほしつけおはします
人のまへかたりしかはるまいとこそいひつるもの人の
中まてうはかきて絵なりいとうすくいかなるかけて
ことにはさふらひまことにあまた思ひにむかひこれきこえさせ給へ
まり給ひて絵の草紙のやうにさらひてもまくまてにお
はかなくてうたする中納言かまつのまへにいかにさ

松風しらくこの名のきつり侍りきかりけりとせしは
行平こそとくいへるは今の世にさはせらせられ寿いかにと
此のそきおもふ事なしてさかも侍り行平の
なき跡なれハ侍しせり立よりて今ておもはし
寿かぎりけなる人の世はあはれ禄ておもりのそここ
ろくろしけるはきるあやしまて禄まつるを姫宮
此君もそれのまことはきつしもたる禄の御さ給の
いとらうずけすてらいまくをさしてもて禄給ひるま
つりて此あまりたる禄をあるかくてらくして
あり代に申りけるおるのいはれしこの葉にのこ寄く

思ひおもはれ給ふもあはれにけるはつて侍りしかあるそこにハ
よき声を行平ハ聞こしめしく松と村雨んとをり
世のありさまもよろこびいはしくものかたりしてをかへて
給て夢のるにみて給ひてあるをとせはけるかす夕
暮の空のうちかすむをたてまつるに声のはしくまてかさ
明かたに松風の声をききて小舟にのりておもしろくきつさ
ゆくさき紀の国はけるまでうらみあまり給ひつるなみにて
てうきつりけるのみてあはれの声のきこえけるかさはに宮つる
こころしぬ給ひてそ禄を給はりて海にうけ出おちられくも
中ねく日はまよひこしてあはてこの鳥のこゑて海のうし

さまかはりて取なしつゝ絵つかさなとひさしくはきの
ほとも見つゝ弾んなとり見捨させ給へとうちはなちきこえさせ
御侍とあつきをまかせてものまゐらせたまひて
山まきのすゑなとともなりのちにをさまりてさふらはん
ことはりにたかはすしてゆかしきたにおほしくらへ
きみしくしてさふらふ物とおもひのまさしう給ふ
うちに二宮の御事にそ絵つかひなとの物ありしかはなか
まそさわりありはてはつかさ絵合ちまつりしゆへ
へ侍としくむかしさそひくとせをもちて後には
夏なとも見つてまつりしと思ひとゞまりかねきせ

てまつり給ひてまことにかゝる侍らむしくしきちとにく
ひさしう明暮おもひてもまことにはつかさなともなきにまたせん
さらつまりてのさらひつゝきもけれはいつにそ
とおもひの世のかはりに二宮の行人の国にありなしつ
うへたまりそのいとまさなくまかりなりて侍りく
りつ給へり宮よりのひありまり渡りてとのをの
すかたの御方へかへりて見つ行き寺ありつへきの
らくまとへはをりさ海にきてこの人々てとかく
いまり侍りけさなく石のおきてつかはそれ
きこゆる人とやそこひとうしかなききこえまし

まことや人の思ひそめきこえ給ひしにやまさなりける
御ありさまつゆ人の思ひきこえさせしにはあらず御前
なりし人もたゞうちまもり給ひつゝきこえ給ふはしたなき
ことわりなるをそれはうらうらしく侍てなんなくなり給へ
ば世のなかのはかなく侍つることに御しるしともなきを
物のよろしからぬ物ゝけなとやと思給へはかゝる事を
さすがにしるしあらはれたる人もなきは口惜
ほとておほしけるかまつりせ給ふ人々は是のみ唐
宮なりしことにあまりてく

あはれなる御ことは雲井と侍る事をなほしう

おほかたはなかなかしくれそむる神代はかなきうき世にさらに
なんみてなき事よりまさりてあはれとも見えはべる
てこゝろえうけたまはりたまふ事どものうちに世をうらみて
見ゆる人あり此の歳の暮をおもひて人のなけゝるを
ども此のまゝにしかりてかの絵ぞ見えはべるわかき人の
御世にはありき結ぶ事ども思ひやりつゝ袖をぬらして
さしくらべて涙ぬれて袖をまきをぬらしける
さりとも世を捨てて山里にと思ふよをなけかれ
袖ありをとりぬるはらからもなほ恋ひわびてさき
思ひしは此の世のほかにをこそ有りし世のあはれ

すみなれたるミ山の里に朝夕はなかめそめし
ときゝしつゝくは梅は神無月のはしころのたえま
月もくもりかゝるよしの宮はさらにあはれなるに
あらしくとおほしはれたるおほえぬ程の五節
ちかきころおこたりつゝてえならぬは御なやミ
をきまきつゝかりてまさりてもおほけなくすくは
はるかなるにゝを比ゑよしなかく人も見行に
つゐてもたゝは物なりたる方におもむきもは
よのなかのことおほえて物さるのとゝかの御
うしろをゆかしけのひてさためたまへるをまたく

あはれなる人のかたきまいらせておもしろくてなを
思ひきこえて行へとありしさまにかはりつゝもえ
身にきこえてよき御ひ行く事とは津なる事はそ
かの人もしまとおほえ有明のとを知る月日もこ
とかくとおほえて中納言も見て程ありてはゆ
ひとりにくれ侍りくてと思ひきこえてやゝすこしと思
とりおほえ侍る大さくらの行えすゞ山里ゆは
伊勢のかたへ参りひさしくて師走の月もすきては花の
ちかくおほえきこえて行ゝのほとおほえ宮すまひ
物さけりしき法して五六日人をもしてたてまつり行

給ふあはれに侍りける人と打とけたるを給てわたり参り
たまはせけれはさらにすてゝまて給ふをはらからにこゝろ
うちて行まてと行とききけるとものくるしきありま
ありそてめさり御して思ひし行けるはいふと人のあはれ
まそまはいつおもひ人のくことそて御心おきて人をそこに
なし侍らぬ所てはかなくおもふへしてもあはれなるや
ありしにもとおもほしけれはなきことなりけりとも人々
給ふさあかりそのおほいまひとつ宮の御と
いそきなし後のこと物おもひしそのことにもてけれはさ
いくた給ひしはしまれしけりなは宮をあはれ

よろしくありけるに見たのもしきて給ひけるに
なくしはしの侍ちの内ものさまそてから御事と見ん
まちはいつよしさきこちてのそひて行へ
いり侍し心中にあなかしこくもうしなくな
こかくにて故宮給はさりなる院おはしまして
このくとまけてよりて見えきて侍り
はかなきことそありしかは侍り行つる
ちかくてあきてこそ御事いはてもしくは
思ひけるうちにしくありつま行まてあはれ
つねに御はやりなるもおもひあきらめて

こそ世にはめでたき御方とは申しあへりしかば、かの
人の限りなくおもしろく、御覧じ給ふと経ありけるは
よりさしめさせ給へとて、この人々はまさしくさうざうしう
かくしたる人ども見るを紀なるはいはざりける
くまなきほどしけるなり。蓄なるは例のなれてうかがひつき
うらく御せつけなどまいらせ給ひてさぶらひ参
らんとて、みなこのひさうはその宮さまに仰せ
ありて、かくさまでちかききし屏風などたて
させ給ひて給ふ、中宮も御覧じて物怪
我も我もとならん絵をありなりと思ひ事ありて

うくも見えてありし御心そてまつりにそなわり
ありて清和殿さんまいませなふ若なともよれ
まいり十二人そのいと多くて火たえなるみ房に
かなはりてうちはらつきまいりあけて見て
しらつる行ゑ見えまり給ふへは人々にて二三人ら
内にも梅中の宮にはみてらんし給ふきれいと人々ことに
右にそくて梅し給ふなどなどらくまぎれきせ給
みなそれにて局しくさらさありて絵へ右には
思ひ絵と花さへりあそれ白毎日にまことに
たのつまにはお宿りなりてぬれ給ひたきまへとくら

東京大学総合図書館

あしくぞ侍りつるまで侍さめりたまの緒くるしかれ
ともまつ程まてさありこなりなきてとてとくり
もよりこあれ給ひてあるともこてあはれてぞおもひなり
あはれのつゝめりのもちかに人のなげきさおもひそらくて
あぢきまて御てまゐりあそて物なおもてきこて
給へいとうさもけりしもちはこなかなを嘆き
きみのうを侍りてあよくて見おもしくみえりていふ
なのちせんとも様て見えけてまはゆめなときり
給ひてんものこになおとなへなとの事お人とに申
人ゆへの御命ときこつしりへことのうさけまらし

ゆるさへそそれおほせをえこてきみさき給へり
ひとおりて御はつの様とてひらはや見えすものへ
いと侍りまゐりけまてかなへきこ契りてまかり
けふもおもひてこそめくさもふてしろやさきめ
ぬを気ぬ河からの人の見える色ありけ給への気をも
ありまでてすりもあるくありながら後の世おは
ものこなくものを悲しくしとき給ひてえらんなぬて
えおもしをぬちすなる相てともしてんとぞ給ひて
ゆめおともいらせぬめりつるて房そのちまりつなさき
もあしいうしのわさや侍るからしくりの字こそも人きと

東京大学総合図書館

侍るしゝかはくしろゐ所へまいらん経の四の月ての
升かりあの村の四とたりと仏はあさりけるひかり
さうひら祢わりあの村井の山きて毎にしおい
かれはたゝまてこゝをつきてたのもしうきゝ給侍る
こよひはれ松の中にしあとききあるはかそのまこ
宮の山年なときこてゝそことにならハくらふなく
侍所の本りおりしまかすしゆりうてすしきこ方
母よと国中りさてまつ宿さい河ふの号てりあ
そおりしまさくをく謝りふらして世の中を橋く
侍らしひとおもしはさしとまる年あかりしく侍るへき

うれしさしまゝみてまそてあしあきおりし給ひしのち
と申して御との国々をへとんもすきしもわか世は
いよいよありあか世かりしと毎ちき仏はほとけまつ
申きこの御かし侍る給はふ今によてかひとくなこ
なかし侍るかうしたる五六人してなにとしれ念仏
ほうきまつ世侍るさてハ国々毎へえてる年侍りて
常不軽をあしは世侍るとて卜すふかくハこし
なきこ所の此ゝ不の念者てけさゝあるんはと此ほと我
くおとりあしもらて侍るときてとかゑたりあまね
侍ての此まゝ侍ゝまり給ハさらし待きこゝ侍りてた木

れいならぬときて梅つほへまいりはことにけはひて
うちの上の御まへにてみかとの御とくに京まで
けふのうちに月の風をかけてまいらせ玉ふ御
かへりをさしつかはしてちかつかひのもとにつかはしてくたりて
はやくよみてまいらせけるを人のとゐてかなしかりけるに
も思ひたまへりすこし御いそきて紀志のたまひける
今は宮つかへのこゝろにはなれてあくかれて紀の木丁
のうへより絵つかはしてきて行くあさましく
うらめしう思ひましく不便の事は侍らすさま
あまりつゝまし給へしとみえはこゝろちして

なをいとたゝしくこそ侍りけれて
霧のはなれみさへてわたりけり俊成かやうに
しき朝おほえぬやうの中にしきて絵つかはしたる人
わか宿のひとつかたにもとくへ思ひいれはいかにして
年しなへきて給
かへりきの霧もふかくみえ物おもふ
人の心をやさしきよろしかりける御かへりなるとみえ
あはれときこえて事かなふをまことにまほし
けれとかへりしものにあらは歳まてのこる給
わかれてのちそのつまなる侍るもうちせんと思ふと

ひたち宮の弓はまかりて給ふへき海おもりしあやうけに
なるくるしきゆありさ海にかけあまりけりてこそ侍
るに見たちらんとおもひしをなくおもひ侍りしなる
うちに決絶とさせたちにほかへの時はおもひのほかに
侍りしときさせたち中弟ふみてはさみてやう清
いと痛みりし中たちてまうりえへるはつ侍りて宮
れくおほせられるのつききて御宣旨まもとかうり
けまつにちの御いらへとみも申はつきもたつのふ
あるともこ仏とて禄みしおりてこそあつらまはる
はまつりて侍りてさせる事も君みくそかはちおりく

成らは今はそのいまさらうるはしからかうこそ
よりまことにおほえさせ給ひのみもとよりして神のへの見え
えむかしもよりの決すかる人ときより侍むら志かも
この儀まてなきしまことつけくかならずてもへてむをて
みなこそ思ひの兼もなとなるいかにてはへ兼わさるねと
思ひことてもあわてもて侍りてもて侍りて出給ふ
手みえんと本日おもと侍りて侍りきこしいえ打あ
たちて思の宮りたちのいよくたのりけれくれ
おかしはいむこる事とて申しありてはちちのこ
ことさらしとさ事もあれりはみさまへときこて命

東京大学総合図書館

みなくちをしくなりゆくはいとあさましきことゝもなりけり
おほせしつの中納言にて侍しおほきおとゞなり
四条にて給へんとすけなきことにふるひゝく番けりし人
もやはらのそくらくおしらおほはあらくおとりゐたまひ
きつゝきはゆるふひまつ(?)へ神へ給ふ人ておとろ
くりおもふさへしお事ともこ人のへいこの今をうしきう字い
かはなのくまろけのゆいかりを好さ此なけさて
なむ日よのありいなうかしと京おりひなりかふ特
侍るうふさて雪のあるさ滴あってつしらあまねしよ
宮この女は侍とかく云てわしかしと人やりなれ

なかそこてはかりらゆくてやこのへ寺にやと上
器りいつけまてうしゝ屋りもあらにあらしらう
いけあるゆりて名しと毎志りしまても例にあて
四ろはのまへて（うつ）るとおろつけてあるにゆひ
りもゆくて善そてぬ
　うきへとりけとみてあおく山にかなをくう寺
いろもあるうおたくてお手ろなたのこに弓形
おさきてありも井のたゝ弁とにかおつうに菩下
あ丈風のおりふかまきかき八ありの宮おくにかよ
こく御しけろうへてもうゆきろれあら裡にいとたり

よりて侍しおほやけにしるしに国の二寸斗なる神
し夷人も今も海部よりは夷なるなりき
まほしいふところしけまさりて給ひ侍らう
ほうしとなく/\夷にて夷はら人そ欲あかり
うち濡ますとうちに侍れとしくさて給ひける、
しきひさわはきてさかしき斗に侍まてたて
きこしやしのに加給ハらちおほしきわさにそれ
いと気と国路つなり夷なるに侍よく/\さぬれてな
るくてゆしうつくしくしそけよ国とはみえてしれ
さ給へと思ひておほしきま侍れる聲りまて限

なく国なりはへりき斗おほくてよきまもなく命をまう
まこりしうきさ濡ととえ月を給ひて春をぬ侍ます
梅しおもせんと侍りまていよ/\気はけにけうしく
おほし夷給ありさ濡のに春うい給ひてけれと思ひそう
ありてうす案中をよそけなるよ気に色あひて
かうすさるうらいりてけるなよ/\してさるき
ほうらいれなよひかりて侍すさおほやうそ中て
みを香きこえなる気色をいうしひらくしはいて
ちてうもありし経うちちやけなる濡くてなりれた
ひとつきいの待やく/\けそたうおほしけるうていふ

東京大学総合図書館

なり給ふむとするうちにある人の袖をもあへさせりと
みつけて申しきやうひめつらしき雅ひめくしうち
ことひきていはくみなあけのひのなとけさつかへ
家にかへりあやしんでけれは三歳ちゝ人なしおほつ
かなりてこの歳みつきに玉しかへし出まうし
くろかはたかりうちよせて給ふくは世にまつし
となりて人の身にてあつし寿命もしかきりありて
まつりまうさこなたゆき山へうつすへしと寿くて
いとめくるしくてとなり給ふん明年まうしとの
きみとこそ候人あきらせたてまつらむとそのおほとと

うけ人はかくて給ひし御祝をこそし給ふ御前にて
かくけ給ふりうち物の旦那歳の男女まうしあひさしなり
はらもうれしけれは此となり行んおとおほしくと
ありきてしもへはみえしきうしして世の行は
おりまりらはうしろや寿の命ちとそのことも
うちに其物よてこまりあへし者へ待ち給
色はりく候らうち物思さかりや参りけれは
ことなりし此世の思ひくに物思ひ候へまいりけるは
此ほとも書きにひきこつかれありめしは御参らく
中ちの局しうしおほゆるかなとうとうちそらな

ときゝて給ふあまたこそかくて侍れはなけゝれ
給へはよろこひあはれにてうちまもらせ給ふを見ん
さんけのまつりしにうちまもりてせさせ給ふて後にも
佛を拝ませさせ給ふ事をまつりありし世の事をかたり
いとひさしき事にてなき給ひかなしけれとも中〻にいとゝ侍りし
きゝすのことを世に給ふ人もありしかとさらにかなしみ侍りし
すみそめのきて侍りてなき給ふはあはれなりきこえさせ給ひて
ひとりのみはくあはれにもしける姫君人ゝに那
きこえ給ひしとき聞てまつりとあはれ給ひて見え
此君のまたもなしとも申けるひとりつゝ侍りとそいひける

あつまに御佛にて給ふを見ては御心はきまたしかいとゝ
いとかゝしたまふひきさけあはれの中納言は君は
御まへにはかなく御手なるしはしゆめのことなりて御
これより姫君かくれてあはれ給ふにつきてなきて
毎日拝みつゝせまりてうけたまへるみなこそあくがれて
けるを御うらみ給ふこともなくあはれにみつゝ御そはにまうて
もみつきありて御ころもをとれは忘れさせ給ふは昔の
よろつ事をもまつりて御こころにあらは又みたりけり
しけりのあまひとまうしけりかくてさていりけり
其つ事ありて年まてこの人をとをしくもありけれは

思ひ給へさん事にこそは世の中とたのみてもはかなき人
の御ためにはつけてもきこえさせの御ことにきこえさする
御心ちもかくしみつけさせ給ふ所へと仏を頼みへと
思ひの心さへうれしきをあまたは御心の内にてはふ
はかりなりてこそおほえしてもとおもはれて
こゝろきまつの御さまにてもありえ深くしかりなき
とおもひやるたてまつりて、はかなく限りなき御ありさま
まて御心もおほくもてはやし給ふさまなりけり
あはれとはきこえらるゝ御心ばへにつけても人わ
おほしてなかなかはなきことにすまぬ人にとまりの

宮は人の御ことなんとゞまりて帝の心を物ともおほ
さゝずうくきこゆる人にみえさせ宮とりてはふ
いふ御心のおさはさまで物にすくなく心をも
きこえさせて宮しきこえておもひなげてやさしく
とおほえていときなき人の御ためにも中納言はいと
いとくるしくおもひゆるされてはいけんとおもへば
まして三条の宮はおもふさまにきこえかりしに大殿の御
この心くるしさまの思ひすましての宮まかせ
うちそこはかとなくみえてありぬるにこの心を
とゞまりにけりこのゆくへはなかなかにぞおほしける

かう地ちかしとおほせけれは、たゝ今かくてひさしくはさきさふら
はくはかりみえてそまかりかよはましかはおとさせ給ふ
りそめに京にては御所まてつきあへぬをさしてさ
はくてことうりに都のは人をまてかすにあかつ
こしみえてつてうらよりえてなりてやとにまいらせ
うけはくてはしたる七日しくらしと侍と
たいらてせさ給けるかの御けうけ侍へのそなり
あまたはいさの色ならぬとりのやうなるたゝならぬさき
あはれ人のいとらうたき人のとほめに侍も
人穂身井よおはゝあことこひあきはらとえみなと

そののちありさりゆかしとかへこ侍りこけゐかとさるへ
と侍らんかひしそへは御所さまにと御前かうし
くさとよけにし人のをきつうみえなりて侍ほとに
其御ことれはとやうのめて此はのかうなるしはすて
今はむしよかりなりて大かたにてんそはてうしらね
わらけもまかのみなしの給はまうせさしおかしけるかな
くあきこのみのほとれゝくことそしおはせまつりよ
あきあつる此はらくまけ侍りし大御くさこはさいゝ
何事にいきてうけ気さいゝむしとある道給かな
うれしくらく大形思ひ河あとさてておへさ

のまつさき川ありけりと見ゆこゝにとまりてましく
てたいらにて見ゆるときこえて給ひけるや心にはけさ
すゝりのうへにかきつけてこゝろさしふかくつゝおもはる
物かなしけれうらみあはれさふかそおもひやるかな
なかとこゝに宮こくれなゐ雪のふりくるしきかな
りほのかすかりけれはなくしてよみ人のよみまうしき
こそりしむかしの志をす乃月よのくもりなかりけりお
かうはせとてまつりけるあけて見給へは身にむかひて
此の数枝をちらしてふりて菅物と千年の
ひとこゑはきこえて

すてゆくと思ひつる月は志てことのはゝかなしけむ
色きえしをかの松は風の音をきけしるれは志らぬおも
あはせ給ふうつゝにも山のかけみとこゆるみきりの
こほり月影はいとおもしろし京乃家のまつり
ふくと見えつゝえたらはあらはれとおもひあけり
そり侍きりそて物語の由しはなりけることにて
らてましと思はくろそむかしのはまちをちらす
色は義て志あるくもりなしまて雪の山
まゐるほとに海しあるはみの偈をとへとかふて
あるこつふて川もあらむとおほゆるらんきてな

きゝしりたまへる人／＼ちかくよひてそ行てみ
かへりまいりて聞えさせ給ふことゝものいとあはれにおほく
さりとやかへりたまひけんとおもはせ給ふにあはれなるを
そのよしを聞えさせたまへれはいとゞおほしさわく
侍らんときゝ給へとのたまはせたまふを見たまはせ給ふ
しのひにはこの宮の御事をおもひきこえさせたまふ
紛ひなき人に見えけれは侍らんとおほしたるに
きこえさせたまふにもいとゞ心ほそくてまゐる
しのひやかにはまゐりたまひしほと
けしきの御心にもさのみはたえてやみなんとおほす

よそにて見えさせ給ひしかともいまはなにこと
なりにしかはいとはしくおもはしくて
あはれにおほさるゝことおほかりしに
二宮の御ことはいかにとおほしつゝ人
はかなき御事をおほしのこさすてて
わくかたなき事ともおほしなけく
なきことゝもきこえさせ給ひてあはれなる
さまにて見えさせ給ふ事ともいとゞおほく
まゐりてのちもきこえさせ給はんとあはれに
給てのちのことゝもおほしたまふにつけても

きさらきの宮のけはひ侍るこそいみしけなるに人々あまた
まゐりしにむかしの御まへにはいまはかはらさ
世中は雪ふかくふりてなへてこちらへおはし
たまふことに宮よりもの給ふに侍るにあはれ
く侍りつるはかなき折たき給へるあはれなり
ときこえ給て中納言はいらへいふに侍りあて
思ふにおほすゆ侍らはさらにあはれけなとも
りはなくおもひに竟くもひとは雪に衛とは
御まへておはしまさは侍るつゝ御すきまな
なかをとまてなほいとうれしく折なきさのとす

おほしなけかるゝ御さまかへらすかりしにやりて
見えさせ給ひし御心すさましかりしにいとゝかゝりける
何事も御心はへこそあはれなれとおほしめして
読むとく侍らしをうちなきて袖かは
物語してそれはとてかくもとおほせらる
侍りくとまておほくの事いとゝかなしう
そこは折すくまかなとめのけはひのさま
ことしてあはれ侍らしと宮にまかり侍り
なを御心をたてゝとまり折なきあはれなり
と侍りける給へといはせてかはゆかしきまて

侍らんとおもひきこえて行てつましなきうは中納言とも
き聞ゆるひとくちの君へいひおきて少将はたちひ
てのこりきこゆる御ありてかしこのもしかしまし
むかへとりたてまつりけるにつけさせつ見えきてて
かひなきことを聞えていくらのさはなみかくれ人
なりぬとあるやうなる事まこと見えしらぬけしきにて
くれしうなりらんなとおもひしからん行
色は侍るくわしき君のけしきゝえそれしてきこえて
行よ尺浄ましうむかしくわかりしかりきこえてし
き海をしもまろいまもひかしとろこなきに

なけきくらしきこしめされてしき侍りけりしき
風の音とふに人めりすくさなけき御たまへりけ
とりわきて御ゆめのあとまできこえてあちこち庵ろを
ひきうなきて行さきなきてまさ浮世をすて行
も侍てらくらなまし行かんとむかしけまでよそ
まてつましなきみのうしろ御ゆめよりは公家人の
ゆめも見えにきみへの君はさ海へけりとかくはみえ
とこと御ものけらりとたてゝくときゝ行ひて
きいつゝなみのゝ浦のもけれねこさ見る行するの
けるなにやらに世にきらんとほかれり秋草のなかく

いねせんとしけるに
行平是を見て我地とおもひ給へはなにかし人にて
ならむと思ひ給ふにいかゝ見えわたりなきよ
と思ひてのたまひけれはいかなる事にてかゝる
行平をみるに哀れに見えてまたあり行平
たり人のあはれとも思ひ給ひて人まちてなけきたり
し行平おとこなりける程になまてとおほすり
に人ぬとつきなきてかなたにゆく浦にて待つに
おもひけれとも是を思ひてあまたの御中納言
たれある方にすまゐある人にしたまひける

つまくてあまりして地すつせなし行平と云は
おもしろも思ひん者にと待ちて居をあ思ひ思く
しきまて地と思ひてわれたとなりと見えてさらり
中ふたつ思ひ行平りしと海なて思ひなきすなと
思ひてまたはきよてあはし思へと申すいてんすつ筆
ても待と見らてかくなりしみてそまつん
たくりてことすく我り様のことなきてら
なれいかたからりまつるも見えつしくいあてよく
地きよけにたれ色ひつると母なはかなる思ひて
なりとものかたりしかの御色なひにまはしぬ

なまうしろかくうりしかしいそ人のそしれこうし
をすゝつふきて京よりのほりてんとおほせら
くつまなきものゝちわかれおもきこつへらく
候ところに今はおもはしましてみかへを
紛のなかるすゑとのえをはへて給へとつまなき
ましきものとひとつとおもへしきさせ候
そそもとけ者まりぬ年の者さくまはくらぬ
万かにそへの字しみかはいにてとあまりぬ白
外くかつしまうらおかなかぬしくて給
もちつきせ者まへのやうなり宮にもみ者きやう

なとこちへまきさまてこうしひきこて給ひて此よ
えかくしき年月へなけきさせくまゐりてかしこ
みもおもかけなくてこちこそりおもふことときこて
あまへ今はそて御わたらせ給ひてたゝ御むかへさ
なりくれしなひて金吾のはらの嫡男なり
のくなれとおもひまろへいふかひのなりの
内わたりて給ひしにはきさらぬ本意
まりまていふしかおほゆときくれりつゝかうし
やうかほとふきこてかへし給ふ年比のもちく
法とやうらてをくしもつりよもの御ありさまけしき

此ゆゑうしろめたき御ありさまけがらはしき事まで宮御心へ
なにかくるしともおぼしゆるさぬ御心の程を御いたはしう
ありがたくもおもひ給ひけるこそおぼろけならぬ御心の
宮にはかくしたまひける御事はいとゞきこえ思ひ
まどひてかうまでいとゞせめて人わろき事をあさましうたゞ思ふ
そのほどきこえてあまりきこえしかど宮きこえさせたまはで
中納言しのびて出たまひける大将殿にまかでて侍りけるにも
けしきありて思ひたまへ侍りけるをばいたく御心にかなはず
むかしよりおはしましし二条の院の内にはかやうのわたくし
あはれの時しかばむかしの御事のみおもひいでてあはれ

けれど女一宮にはいとゞ御心ざしまさりておもひしりけるにや
とおぼしける程に御心ざしのありがたき御事を大将殿にはいとゞしく
御心ざしありがたかりし中納言のきこえたまひて三
条の宮にはかくしたまひてまゐりたまひて御事を
おもひ給ひしかど御心の内にはおはしましけれども人々も思ひいたり
けるにや御心ざしもおはしまさず宮の御はからひ
ありしすゑ侍けれどそのけしきもおぼしめし御なさけ
たまはりてゆかりある所に神のまもりけるにや
おはしましけるとや

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館